
純情と愛情と情緒不安定

継那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

純情と愛情と情緒不安定

【Nコード】

N3125P

【作者名】

継那

【あらすじ】

漫画みたいな展開！家に帰ったら美少女が三つ指ついてお出迎え！

お約束的な嫁入り発言と共に始まった暴走少女との生活。ハイスピードなラブコメ？です（ヤンデレ有り）

プロローグ

突如、唐突、突然、どれでも良い。取り合えず俺は不意を突かれたんだから。

こんな事態、漫画かゲームくらいでしか起きない。もし起きたらそれはベタベタだ。もう「は？ 今更今時こんなネタ？ ばっかじゃないの！？」みたいな……………ってなんで今の俺のイメージは少しツンデレってかツンツン口調だったんだ？

つてのは置いといて、取り合えず、何とか、落ち着いて、説明を始めよっかな。とか思うけど、やっぱり納得いかねえ、説明始めなければ始まらないし、このまま全否定出来ないかな？

「こんばんは、これから末永くよろしくお願いしますね正太郎様」
こ、こら！俺の頭を狂わせている当人が割って入ってきてはいかんでしょ！？

「あう？ 正太郎様？ あうう、もし？」

本気で心配そうな顔してキャパを超えてフリーズしてる俺を観察しないで、もう動きたくないんだから、もうこの現実を見ないで、これ以外の並行世界の現実を受け入れてそれを本当の俺の世界にするんだから。

「あう……………正太郎様……………私、やっぱり迷惑でしたか？」

泣き出しそうだ。まずい、なんか気持ち的にまずい、女の子が泣き出しそうだよ。

「オイコラ！ 息子よ、いつまでこんな美少女前に押し倒しもせず
に突っ立ってる！」

何かでスパンと叩かれた。視界すら動かす気にならない俺は、それ
を先程までこの声の主、つまりバカ母上が読んでいた女性誌を丸め
た物と推測。

ゴツン。

おかしい……………丸めた女性誌でこの音はおかしい……………

「あう！ 正太郎様？ 大丈夫ですか！？ あ、あの、お義母様、
いくらなんでもそれで突きは……………」

「良いのよ。紗羅ちゃんみたいな超絶美少女目の前にして、貴方の
お嫁さんになります好きにしてください、と三つ指ついてまでして
下さってくれてんのにこのドラ息子ときたら」

「だあああああつ！ なんで急にそんな現実であつちやいけない展
開なんだよ！」

「しよ、正太郎様、落ち着いて下さい。後、私は現実ですよ」

「後、急に押し倒したりしたら捕まるわ！」

言っちゃった。言わなきゃいけないことを流さないで言っちゃった
ぜ。

「あつ、子供は前提ですから紗羅は構いませんよ」

.....

ゴツン。

「鼻血垂らすな。この危険人物」

そりゃないだろおつかさん.....

一話

ねえ、君はどんな大人になりたいんだい？

え？うーんとね……………パパみたいな！

おっ、ははは、嬉しいね。凄い嬉しいよ。うん、今日は記念日だ。
親子記念日。

えへへ、でもパパ、ママに怒られちゃうよ。カレンダー記念日だからだつて。

う、でもね正太郎。記念日は良いことだ。良いことはいくらあつたつて良いんだよ……………

あれ？俺は、俺は……………田中太郎？

「オイ息子、ちょっとやり過ぎたかなって心配したが、お前が予想の三万倍以上バカだと理解した」

酷い。以上つて事はそこから先は無量じゃないか。計り知れない！

「正太郎様？ お加減は？」

お加減つて……………加減なく母親にぶつたたかれたつちゅうに。

「紗羅ちゃん、本当君何なの？」

ガシン。

説明するよ！今は別にロボットが歩いたとか、そういう音じゃないよ？俺の頭と俺の部屋にある辞典が衝突事故を起こしたんだ。過失は確実に辞書の運転手の母親だ。過失百パーセントだ。

「あう、正太郎様！」

「オイ、いい加減しとかないと、私もいい加減を守れないぞアホ息子」

言うておく、誤解が生まれないように出来るだけ早目に言うておく。俺の家族は母親との二人だ。だから助け合って生きてきたため、家族中はかなり良好だ

ガコン。

今のは別になにかの機械の駆動開始音とかじゃないから。俺の首が機械のレバーのようにおかしな方向を向いたただけだから、本当、気にしないで、うん、俺も気にしてないから。

「い、いたい……………本当、すげえいたい……………」

「あんまり失礼な事を言うな。折角嫁に来てくれたんだぞ。超絶美少女花嫁が」

そりゃ可愛いのは知ってる。見りゃ一発だし、親戚の集まりで何度か見てるよ。忘れるわけないだろ。俺の初恋なんだから。

「つか、親戚だろ？ 結婚とか良いのかよ」

「ああ問題ない。血筋上はあれだしな。向こうのじい様は何故か、何故か！ お前の事気に入ってるからな。だから血縁が欲しいんだろ？ 子供まで出来りゃ万々歳さ」

あゝ、頭叩かれた過ぎた。いくら体が丈夫なのが取り柄でも、流石に思考の要である頭を集中攻撃されたらあまり思考出来ん。

「あう、正太郎様は、私がお嫌いですか？」

「いや好きだ」

「ひゃう！」

……………あれ？今俺なんて言った？

目の前の紗羅ちゃんは顔真っ赤、そのちよつと後ろに立っている母さんは猫の目みたいになんか輝いた瞳になってるし。

ああ、俺ベッドで寝てたんだ。全く気付かんかった。首と後頭部と側頭部と前頭部が痛い事しか分からん。

「あ、あう！ 正太郎様。日向紗羅、よろしくお願い致します。あ、

不束者ですが、ああ、不束にならないように精進して………あ
う、正太郎様お慕いしています！」

「あら逆に息子が押し倒されちゃった。大胆ね、最近の子は」

いや、バカ母、俺の首が極まって………落ちる。落ちていく………

………

日向 ひむかい 正太郎 しょうたろう なんて大層な名前だけど、真っ直ぐ生きれてる
のか。目標はある。その目標は輝いていて、遠くて、手が届く気が
しないが、きつと掴んで、いや、追い付いてみせる。

「ん？」

なんか人生の目標に向き直った夢？

目標としている人物の優しい笑顔が頭に浮かぶ。

うん、今日も元気に、笑って行くか。

「あつ、正太郎様おはようございます」

「っ!」

え?え?何?何なの?もう止めて、俺の脳の処理能力を軽くごばい、いやいや、五倍は超えるこの状況は一体何!?

「同衾。ま、意味合い的には清い感じかなあ」

「母さん! 何ドアの隙間からビデオカメラ持ってニヤニヤ笑ってみてる!」

「はいはい、説明台詞ご苦労さん。ほら、さつさと朝飯にするよ。紗羅ちゃんなんて、着替えて、朝ご飯作って、パジャマに着替え直してアンタの隣で寝直してんだから」

横の紗羅ちゃんを見る。目が合うと紗羅ちゃんは優しく微笑んでくれた。心がとても優しい気持ちになるが、そこまでするか!?

つか、

「なんで一緒に寝てんだよ!」

「あう! 私は正太郎様の妻です! 同衾は当然の権利であり義務です!」

うお……………何か昨夜からの口癖と思われる「あう」は大体驚いた時のリアクションとして使われる事が多そうだったが、今の「あう！」はもう攻撃的というか、防御ではなくこっちにズカズカ入り込んでくる感じ。続く発言も、さも当然と言った形で力強すぎる。

何か、黙っていると日本人形みたいに静かで、黙ってれば静かなのは当然だが、なんかこう……………そう影があるというか、森の奥にひっそりと隠れている泉のように神秘的で、綺麗なイメージを受ける子なんだが、「あう」のせいで近寄りやすい子供っぽいイメージを受けるな。

「あの、正太郎様？ 森の奥に、の後のは何だか微妙です」

「ええ、予想以上のセンスの無さね。てかセンスって言葉に失礼」
母上よりも、まず紗羅ちゃんに駄目だしされたのがへこむ。しかも俺喋ってないし。

「あの、正太郎様？ 私のパジャマどうですか？ 正太郎様はパジャマ好きと聞いたんで」

……………何故、一体何故俺様のフェチが露見してる。確かに、俺は何を隠そうパジャママイスター、パジャママスター、パジャマ

「正太郎様！ どうですか！？ 私、凄く悩んで決めたんですよこのパジャマ」

ふむ、そこまで言われれば鑑定せねばなるまいな。

取り合えず、いまだに一緒のベッドにいるのはまずいので、ゆっくりとベッドを脱し、掛け布団を剥ぐ。

うむ、横向きで寝ている女の子のパジャマ、うん、素晴らしいな。仰向けとは違い体の隆起の見え方も違ってくる。俯せでも、腰から太ももまでのライン等の楽しみかたぐあ！

「なあ変態息子。ちょっと後戻りきかないくらい気持ち悪いから止めてくれるかな？」

「……………はい……………ずんません……………」

こりゃ首が駄目かな。痛くなくなってきたやがったぜハハハ。

「あ、あの正太郎様？ 私のパジャマは？」

「うん、基本を押さえた好成绩。後、意外にスタイル良いんだな紗羅ちゃん」

何だかパジャマ夢中で、意識が戻ってきてから紗羅ちゃんを見ると気恥ずかしくて目を逸らしてしまった。

「へ？ あう、正太郎様の事一杯考えたら育ちました」

もうこの子凄いわ……………色んな意味で。

うーん。急な展開過ぎて脳が追い付いて来ないから、昨日学校から帰った辺りから整理するか。

帰宅 三つ指ついてお出迎え 貴方の妻になりますね 以上

うっわ！少なっ！こんな簡単なイベント内容だったか！？

だが、強烈なモノは強烈だったな。

帰ったらエプロンまで装備した女の子が帰りを迎えてくれて、それが忘れもしない初恋の人なんだからさ。

始めて会ったのは古すぎてあまり思い出せないけど、父さんは父さんの父さん、つまり祖父さん、この祖父さんが集まるのが好きで親戚連中を集めては、宴だ、とか言って飲み会を開いてたんだ。そんな時に親戚連中、老若男女が入り乱れる中、その時………確か八歳だったかな？八歳の俺が遊べる同い年ぐらいの相手が紗羅ちゃんだったわけだ。

幼少の紗羅ちゃんは寡黙な雰囲気、何だか人を寄せ付けないオーラを放っていたが、そこは八歳の子供、そんなの無視して遊びに誘い続けた。別にかなり人が集まるところだったから、同い年ぐらいの子供が他にいないってわけじゃないのに、あの頃の俺は絶対に紗羅ちゃんと遊ぶんだと息巻いて、大体会う度に本を読んでる紗羅ちゃんに声をかけつつつけたっけな。

そして、父さんが死んでからぱったりその集まりには顔を出さなくなつて、紗羅ちゃんとは……………七、八年ぶりくらいになるのか。

あつ、訂正しとくけど、日向紗羅、じゃなくて中城紗羅なかしゅうまゐだったぞたしか。苗字はあまり覚えてない。

というか、紗羅ちゃん綺麗になつたよなあ。大人っぽい見た目なのに、「あう」というキャラ付けまでバツチりだもんなあ。

「正太郎様？ 似合いますか？」

ん？すっかり周りを見てなかった。

朝食後に時間があつたからお茶を飲んでいたんだががが……………

「あう、今日から同じ学年同じクラスですよ」

この一言で大体理解した。後紗羅ちゃんの格好。朝食の時は昨日着ていた服だったのに、気付いたら俺の学校の制服だ。一体何回着替えるんだよこの子は。

「同じクラスまで決まってるの？」

自分でもこの質問は的を射てるのか、外してるのかわからないけど聞かすにはいられなかった。

「はい、こういうときに使うから権力というのは便利だ、と御祖父様が言っていました」

クツソ。紗羅ちゃんにいらん事吹き込みやがってあのクソジジイ！

じい様が齒を見せ付けるように笑ってブイサインをしているのが頭に浮かぶ。正直、かなり興味ないが、あのじい様金持ちらしい、つか、庭とか見る限り異様な金持ちだろう。そこまで興味ないが。ということ、その関係上紗羅ちゃんも少なからず影響を受けているらしい。

感謝してるところはしてるが、純真な紗羅ちゃんに余計な事してんじゃねえよじい様め。

「あ、後、御祖父様が今日の放課後迎えにくるそうですよ」

……………うわぁ。面倒だな。

「……………うわぁ。面倒だな」

「あう、正太郎様、思ったまま口に出てますよ」

「今日は……………遅くなりそうよねじい様に呼び出しくらってんだから」

呼び出しくらうって、なんかガラ悪いなうちの母上様は。

「まあ、多分ね。明日も学校あるし、そんな無茶はしらないと思うけど」

「ま、気楽に一人で飯食うわよ」

「ああ、お土産は期待しないでな」

「婚約者パート2とかは勘弁してよ」

パート1だって勘弁したいよ。

「あう！ お義母様！ 正太郎様の妻は私だけです！ オンリーワンです」

さて、玄関で話をズルズルしてもしようがない。

「行ってくるわ」

母さんは格好よく右手の人差し指と中指だけ立てて、それを額に当てるとその指を少し前に出す感じの動作をしてドアを閉めた。クツ、不覚にも格好よかったぜ。

「あう、正太郎様、聞いてますか？ オンリーワンですよ？」

「はいはい、制服似合ってるよ」

「あう、ありがとうございます。えへへ……………あれ？ なんか話が逸れたような」

なんだかこの娘の扱いが分かってきた気がする。

にしても、じい様か……………最後に会ったのはいつだったかな？

俺は遠くを見つめたくて空を見上げた。そう　　あれは、じい様と最後に会ったのは

二日前の夜だな。その前は二日前から更に一週間前。

……………月に会う回数は平均十回前後。確かに、じい様の家はここから比較的近い、近いが、いくらなんでも会いに来過ぎだ。確か、じい様の子供は四人、俺の叔父さん叔母さんにあたる人は三人いるはずなのに……………もしかして、毎日ただ孫や子供に会いに行ってるだけなのかあのじい様は。

いや、仕事の意欲はまだ健在で、秘書さんつけて車で走り回ってるはずなんだがな……………うん、興味ないから今考えた事は全て忘れよ。

「あつ？　正太郎様、あちらの女性がこっちに手を振ってますよ」

思考を終了して、俺の意識が戻ってくると俺の半歩後ろを肅々と歩いてくる紗羅ちゃんが話し掛けてきていた。

紗羅ちゃんの言葉に従って、その女性とやらを見る。

「いや、違つぞ紗羅ちゃん。あれは女性ではない」

「あつ？　でも、女性用の学制服ですよ？」

「うーん、見て分かると思うけど、十七歳の女性としては些か胸部に発達が見られなさ過ぎやしないかい？」

「むっ、正太郎様、あまり女性の胸なんて見ないで下さい。私がいるんですから」

「いや、だからあれは女性なんかじゃげぶう！！」

「やあ、正太。あまり調子に乗っていると……うん、捻るよ？」

何をだよ。つか、既に俺の腹に一撃いれて、手を捻っちゃいけない方向に捻ってんじゃねえか。あれ？おかしいな、声が出ないぞ、今喋ってるつもりなのに。

あっ、なんか喉の辺りを手で圧迫されている。そのせいか。納得納得。

「あう、正太郎様、どなたなんですか？」

「……………（パクパク）」

駄目だ、声が全く出せない。震えよ俺の声帯！

「はて？ 君は誰かな？ 見たところ正太の知り合いみたいだけど」

「あう！ 私は日向紗羅、正太郎様の妻です」

違う、苗字が違う。くそ、離せよ。うわ、男の俺が利き手の右で外しにかかってんのにビクともしねえ。やっぱり女じゃないという解釈は……………

手が駄目になった。

「そうかい、ボクは佐山愛愛と書いてめぐみと読むんだよろしくね」

愛の常套句、自己紹介の固定ネタだ。爽やかに笑顔、短い髪、平らかな胸が印象的ななななな。

肋骨あたりかな？なんか嫌な音をたてたぞ今。

「正太郎様から離れて下さい！ その手も肋骨も首も全部私のなんですから！」

色々言いたい事はあるが、肋骨を攻撃した愛のあの異様な速さの一撃に気付いてたんなら止めたり、安否の確認ぐらいしてくれ。

まあ、その安否の確認は無駄か、だって駄目だもん。

「ふむ、ボクの玩具を取り上げようって言うのかい？」

「正太郎様は、私のです」

何でこういう時だけ夫だとか言わないんだ。玩具扱いか？俺は皆の玩具なのか？

そしていい加減腕と喉を解放してくれ、いや、してけれ、してくださいよ。

「うーん、正太郎の妻ね……………昨日今日でそんなキャラ急に現れても困……………ふむ、もう遅刻してしまうな。では参ろうか正太？」

手を解放され、愛はその空いた手で俺の頭頂部を押して無理矢理首肯させる。俺に人権はないのか？いい加減発言権を返してはくれな
いか？そして、何で紗羅ちゃんは凄く恐い形相でこちらに？って、
あれ？

一瞬、一瞬だ。瞬きを終えたら、自分を捕縛しているのが愛から紗羅ちゃんにかわっている。

そして、紗羅ちゃんも俺の喉を押さえ、発言権を潰している。

「ほう、やるな正太の嫁」

「ハア、アー、アアア」

「そして何をやってる正太？」

お前の発言のお陰で、紗羅ちゃんが喜んで両手を頬に当てて照れてくれたから俺の喉が解放されたの、それで声が出せるかどうか試してたの。

「そういう説明は声に出せばいいじゃないか」

あっ、そうか、もう声出るんだった。

「とにかく！ 正太郎様は私のなんです。もちろん、私も正太郎様
のです。ですから、私以外の女性は正太郎様には必要ありません。
もう近づかないで下さい」

俺と愛の間に無理矢理入ってそう宣言する紗羅ちゃん。紗羅ちゃん

の表情は見えないが、紗羅ちゃんと対している愛の表情は………
すっげえ楽しそうだ。

なんでだ？

「正太の妻、紗羅と言ったかな？ 残念ながら、ボクを排除しても、
正太に好意を抱いてる子は山ほどいる。そんなんじゃ身がもたない
よ」

不適に愛が笑った。なんかそんな掴み所のないキャラのくせに、な
んで胸がないの気にしてるんだよ。

ごめんなさい。今横切った何かで、髪が少し無くなりましたよ。

「正太郎様！ 本当なんですか？ そんなに、その、女性関係がふ
しだらなんですか？」

ふしだらっておかしいよね？なんか卑猥に聞こえるんだけど。

「いや、愛の虚言だろ。俺モテた記憶ないし」

「知らぬは本人ばかり、と」

不穏な言葉を残して愛はさっさと行ってしまふ。

「あつゝ」

そんな恨めしそうにしくなくても。

「正太郎様は嘘つきです！」

本当に君はいきなりだな。とりあえず起承転結の承から入るなよ。いや転ぐらいか？

「全然モテないと言いましたが、正太郎様に恋愛感情的な好意を寄せてるのは全校で三人いました。これから校内で絶対に私から離れては駄目ですよ」

起承転結の起を説明すると、やっぱりこの子は自己紹介時に先生より先に黒板に「日向紗羅」と書いた。言うまでもなく、わがままボデーを持った超絶美少女（名付け母）だ。それが日向を名乗って、更に俺の妻だと言ったらもう、もうクラスの男子からの殺気や、実害や、直接攻撃ダイレクトアタックがハンパなかった。

「って三人？ 三人もいんの？ つかいつ調べたの？ その情報は確か？ 相手は？ 学年、パジャマは？」

「あつつ、今までに見た事がないくらいに食いつきに少々戸惑っちゃいます」

もしかして先輩？後輩？同い年は……………ないかな、愛のせいだな

んか同い年の女子の評判悪いし。

「遅い妄想に浸ってる所悪いが、彼女は一言も異性と言っていないぞ」

「……………な、な……………な……………」

今俺の頭に居たのはパジャマを着た女神達、それが背後からのハスキーな女性の声によって、マッスルでハッスルでムキムキな漢達の笑い声とパジャマの間からはちきれんばかりに自己主張する筋肉、なぜだ！なぜそんなサイズの小さいパジャマを着るんだあ……………やめろ、寄るな、パジャマを冒瀆するな！くそ、くそおおおお

「おつ、と虐めすぎたな。妻には悪いが、これだから正太弄りはやめられん」

そんな言葉も今の俺には全く理解出来ない。肉体は活動してるから声は聞こえるが、脳がその意味を処理しない。

「正太郎様！ 愛さんも、何度も言いますがあまり正太郎様に近づかないで下さい」

「全く、休憩の時間の度にこれだ。よき妻は、これくらい寛容でいるべきと思うのだが？」

「休憩の度に近づく愛さんがいけないんです。それに、正太郎様の視線も声も触れた感触も、全部全部私のです。誰かにそれ一つでも取られるなんて嫌なんです、絶対に嫌」

「ふむ、あまり聞いていて気持ちの良い発言じゃないな。正太はそ

れを望んだのか？」

「その正太も止めて下さい！ あう……………あうう嫌だ……………嫌だ、嫌だ……………」

「おい！ 正太の妻」

冗談で気絶してる場合じゃねえ！

再起動、紗羅ちゃんが頭を抱えて床に座り込んでいる。

周囲の目や、ざわつきに脅えるように体を震わせている。愛が声をかければかけるほどビクンと反応して余計に怖がっている。

もう体は勝手に動いていた。

紗羅ちゃんを抱き上げて、廊下へ向かう。

「お、おい正太」

「正太郎だ。愛、不安な転校生に言い過ぎはよくないな！」

ちよつと大きめの声で、周囲に聞かせる。

「んじゃ、後は頼んだ」

「ボクを患者にするとは……………貸しだからな」

周囲に聞こえないトーンで話す、そして階段、目指すは保健室だ。

保健室に入ると先生もいないようなので、黙ってベッドを借りてそこに紗羅ちゃんを寝かせた。眠ってしまったのか、気絶してしまったのか、紗羅ちゃんの意識はないようだ。

本当、どうしたんだよ。

「邪魔するぜ」

保健室の扉が開く、そして、嘎れた声が入ってきた。

俺はその人がこちらにくるより先に、ベッドの周りにあるカーテンから出て、その人を確認する。確認するまでもなかった。

俺の祖父だ。じいさんは着物に半纏といつもどおりの格好だ。

「早速来たか、昼休みと授業一つくらいは諦めるから、話を……
…まずは場所をかえよう」

「応。全く、孫と世間話する時間もないとは」

好々爺、じいさんの中身はそれがピッタリな言葉だ。だが、外見はそうじゃない。老いによって多少鈍くなってしまったが、顔に刻まれたしわの中に見える精悍さ、時折見せる眼光の威圧感やはり人

の上に立つそれだ。

「ほら、あの子は私が見てるからとっとと行きな」

「うつせえババアだな。孫とのんびり会話もさせらんないのかよ。紗羅は俺の大事なベイビーだからな。しっかり見てるよ」

「気持ち悪い事言つな。この学校の子は全て私の子供だ。言われんでもしつかりやるよ」

じいさんの後ろから登場したのはこの学校でとても、とてつもなく偉い人。

え？じいさんそれ理事長だよな？やめて、なんか心臓に悪い会話やめて、ただでさえ二年生への進級ギリギリだった俺のクビを簡単に落とせる相手なのに。

「ほら、行くぞ正太郎」

そう言っつてじいさんは保健室を出て行ってしまつ。

「紗羅の事、話すぜ」

ここはどこか？早々学生が入る事はない学校の中の部屋、理事長室

さ。その中の向かい合うように設置されている応接用のソファーに座っている。

「どうぞ、坊ちゃん」

そう言って目の前の机にお茶を置いてくれるじいさんの秘書兼雑用兼お世話係兼その他色々の斎藤さん。年齢不詳の見目麗しい女性だ。

「あら、中々良い男になりましたね坊ちゃん、お菓子を追加します」
煎餅まで出てきた。やはり出来る女性は違う、気配りも、何もかも違う。凄い人だ。

「はい、坊ちゃんにはあんみつも追加です」

「……………おい、斎藤君よ。俺にも茶ぐらいくれてもいいんじゃないかねか？」

「あら、社長急須は目の前に置いたじゃないですか」

「湯呑みは！？　じか飲みしろってか？」

「え？」

「なにさも当然って顔してる。全く、正太郎にはとことん甘いな君は」

「社長に言われたくありませんよ」

ちよっと悪ぶざげが過ぎたな。紗羅ちゃんが心配だし、さっさと戻

ってやんないと。

「んで、紗羅の話だったな」

ようやく真剣な表情になったじいさん。

紗羅ちゃん。急に家に来て、妻になると言っつて、一生懸命な子。俺はあの子が嫌いじゃない、むしろ好きだ。だけど、昔の彼女ならまだしも、今は全く知らない。

「正太郎、こつから興味本位じゃ聞いぢゃなんねえ。大事な話だ。覚悟はあるな？」

覚悟。正直色々急過ぎて覚悟なんてない。でも、あんなになつてしまった紗羅ちゃんに何が起こつてるのか知らなくちゃ、じやなきや守る事も助ける事も出来ない。

「ああ、まだ浅い覚悟かもしれないけど放つてはおけないよ」

「そつか。なら聞けよ」

それから始まつたのは酷い言葉達だった。

紗羅ちゃんが虐待を受けていた事、じいさんがそれに気付いたのは二年前って事。

紗羅ちゃんの家は両親との三人家族だった。父親は仕事で海外を飛び回り、一年に家はおるか日本にもいる時間は殆どなかった。

お母さんは再婚でやってきた継母らしく、紗羅ちゃんには酷く冷たかったそうだ。それがいつからか暴力に発展、気付けば軟禁のような状態になって。中学二年生の出席日数は五分の一にも満たなかった。

幼少から冷たい扱いを受け、コミュニケーション能力を高められなかった紗羅ちゃんは中学では友達と呼べる人はおらず、それゆえの不登校と見做され、誰も紗羅ちゃんを助けなかった。

そして、紗羅ちゃんの父親と親戚であったじいさんは、紗羅ちゃんの事をとて可愛がっていた。まあ、じいさんは紗羅ちゃんの虐待に気付いてもやれず何が可愛がってた、だよと自嘲していた。

ようやくじいさんが気付いた時には、紗羅ちゃんはただ継母のために家事をする奴隷のようで、心はかなり蝕まれてしまっていた。

怒った、それではすまない、激怒したじいさんは継母から紗羅ちゃんを取り上げ、紗羅ちゃんの父親を強制的に呼び戻し、父親をボロボロに殴って離婚させ、紗羅ちゃんを無理矢理引き取った。

そして、紗羅ちゃんは入院。心も体もボロボロの紗羅ちゃんをじいさんは必死で助けようとした。

そして、じいさん、ではなく斎藤さんが気付いたらしい。紗羅ちゃん
が病院に入ってからいつも握っていた物に。

小さな石だったそう。小さなその辺に転がっている石。でも、大
事な物だと判断した斎藤さんはそれがなんなのか懸命に聞いた。

そして、そこで俺の名前が出てきた。

俺が送った石を持って、必死に堪えてきたんだと、生きてきたんだ
と。

じいさんは言ったそう。病院から出られるくらい頑張れたら俺に
会わせると。

そこからの紗羅ちゃんは凄かった。活力に満たされ、遅れきってい
た勉強すら年齢以上まで学力を引き上げ、なくしていた対人能力も
少しずつ回復し、あつという間に今の状態までになったそう。

それがじいさん、斎藤さんに聞かされた紗羅ちゃんの過去。

「……………あ……………う……………」

「起きたか？」

「正太郎様？ 私……………そっか、やってしまいましたね」

目を覚ました紗羅ちゃんは酷く落ち込んでいた。俺は優しく頭を撫でてやる。くすぐったそうに目を閉じる紗羅ちゃん。

俺は、日向正太郎は何をしてやれる？

「私、また一人になるんですか？ また、あそこに戻るんですか？ 嫌です、やっとしよう君に会えたのに、やっと私は」

俺は紗羅ちゃんのほっぺを親指と人差し指で摘む。これぞ必殺ピヨピヨの口だ。

「あんまりいらん事を考えるな。俺は、君が好きだよ。だから守ってやるよ。どんな恐い事からも、どんなに痛い事からも」

ピヨピヨを解くと、紗羅ちゃんのは更に落ち込んだ。

「聞いてしまったんですね私の事。いつか自分で話そうと思ってたのに、正太郎様に同情と一緒にいてほしくなんか無いのに」

更にピヨピヨ。

「だああああ、上手く言えない。上手く言えないんだけど、同情とかそんなんじゃない。ほら！」

俺はズボンのポケットから石を出す。そう、小さな石だ。その辺に

転がっている何の変哲もない石。

紗羅ちゃんは慌てて自分の胸元をまさぐる。急な精神攻撃に俺は慌てて目を背ける。少しシャツから覗く白い物が見えたぞ。

「あっ……………」

もう一度紗羅ちゃんを見ると紗羅ちゃんは泣いていた。

「それと呼び方、様付けやめろ。さっきの……………しょう君とかでも良いから」

「しょう君、こ、これ、あの」

早速呼び方変えたな。ちょっと微笑ましい。

俺は紗羅ちゃんが震えながら出してくる石に俺の石を合わせた。流石に完全にピッタリとはいかないが、石が二つ合わさって形を作る。

「嬉しい……………私嬉しいです……………こんな幸せな日があるなんて……………」

俺達の間で形を成すハート。なんだか無性に恥ずかしい。

「斎藤君！ 証拠は!?!」

「完璧です社長」

「よし、後は婚姻届だ!」

「既に印鑑が押されたのがここに」

「よし！ 挙式日は！？」

「坊ちゃんの誕生日」

「くっそう！ 待つてらんねえ、政界に乗り込んで法を」

「いつまでやってんだこのバカジジイ！」

「可愛い孫達の結婚をだな……………」

頭痛い、本当、疲れるよ。

「しょう君、大好きです」

急に抱きしめられた。

好きだけど、恋愛感情かどうかわからない。曖昧だけど、この子が大切って事にはかわらない。

だから、上手く言えないけどこの子が幸せになれる場所を作ってあげたい、この子が俺以外を好きになるもいいし、とにかくこの妹みたいに放ってはおけないこの子を守ってやろう。父さんのように。

一話

「しょう君朝ですよ、起きて起きて」

「そこだ、既成事実を！」

「録画準備完了」

「早く起きないと……き、キす！ しちやいますからネ」

「もう一步、それで俺達の計画は完遂だ。後はひ孫を待つだけだ！」

「名前は何にしましょうか」

「そりゃあ、紗羅と正太郎で流星だ」

もう我慢出来ん！

「いい加減にしろ！ はい、紗羅ちゃんおはよう」

目を瞑って唇を突き出している紗羅ちゃんの頭を撫でる。最近はこのやっつてあやすと問題が起きにくい。色んな意味で。

後、あの二人は許せん。

「な、なんだ正太郎。どうしてそんなに怒ってる？ 流星が嫌だったか？」

「そうですね、なら私は下に行って朝食用にジュースでも作りまし

ようかね。ジューサーを用意しないと」

目視ではとらえられない速度で悪Bの斎藤さんは消えた。

後は悪Aのじいさんだ。

「ま、待て正太郎！ 話をしよう！ 話を聞け！ 俺がプレゼントした百科事典を置け！ 待てそれはマズイ！ 嫌あああああ！」

よし、悪は滅した。

「正太郎様 しょう君、お義母様は今日も帰られないそうです。本当は二人きりがよかつたんですが御祖父様達が」

「まあ、じいさんは放って置いて、さっさと朝飯食べて出掛けるぞ」
彼女が家に来てから一週間とちょっと、学校にも危なげながら慣れてきて、危なげって部分は紗羅ちゃんではなく、紗羅ちゃんに求愛されている俺に対しての嫉妬心からくる攻撃の話だが。

紗羅ちゃんには友達も出来て、俺としても一安心といったところ。裏で愛が随分根回ししてくれたみたいで、今度紗羅ちゃんに見つからないように飯でも奢ってやろう。

というわけで、休日の今日は、家、学校、スーパーの三つの場所を行き来することしか出来ない紗羅ちゃんを駅前まで連れて行くことと決めた。紗羅ちゃんは『デート、これがデートなんですね。愛し合う二人が愛を深め、確かめ合う儀式。デート！』とりあえず暴走した紗羅ちゃんをピヨピヨ口にして、昨日を終えた。

やっぱり、一人で冒険させてこの辺を覚えさせるのは恐かったので、それを禁止していたら、友達と帰りに遊びに行くのに誘われたら、『申し訳ありません。私は旦那様にスーパーに行く以外は真つ直ぐ帰りなさい』と言いつけられていまして、誘いには………ちよつと』とか言い出してくれやがるもんですから、俺の女子の中での株が大暴落、女子とすれ違う度に舌打ちされる始末。可愛くて、素直で、ひたむきなもんだから女子人気も高い紗羅ちゃんに安心するような辛いような。

駅前に行けば、紗羅ちゃん的生活用品も見れるし、休日に女友達と出掛ける時も便利になるだろう。

「坊ちゃん、この私、斎藤、が作った。斎藤、によるデザートのおんみつをお楽しみ、斎藤、下さいませ」

最後の斎藤の部分はいらなと思いますよ。朝食を作るのを紗羅ちゃんに却下された斎藤さんは、プライドに傷を負ったらしく、デザートは私に、と紗羅ちゃんに必死で食い下がっていたらしい。じいさんから聞いた話だ。

「あの、斎藤君？ 俺のは？ 俺のデザートは？」

「お嬢さんも召し上がって下さいね」

「はい、ありがとうございます斎藤さん」

「おーい、俺にはないのかな？」

「あら旦那様、私ったら旦那様の分を忘れるだなんて、メイド失格だわ」

そう言っただけに出される器。ちなみに、斎藤さんは仕事時、家時等などでモードを変えるらしく、じいさんの呼び方も変える。今は世話係モード。

「おう、あんがと………な。斎藤君よ。朝食作れなくて凹んでんのを正太郎に報告したのまだ怒ってんのか？」

「はい？ 何を言ってるんですか？ あんみつを召し上がって下さいな。あれ？ まさかこの馬鹿には見えないあんみつが見えませんか？ あまり学力の良くない坊ちゃんすら召し上がってるというのに」

口元に手を当てて嫌らしく微笑む斎藤さん。つか、俺の話は余計ですよ。

「いやあ！ 美味しい、美味しいね斎藤君！」

お前は裸の王様か！

(しょう君、私、絶対に負けませんからね。応援してください)

じいさんが騒いでる横で、俺に小さな声でそう言ってくる紗羅ちゃん。はて？何を応援しろと？

「御祖父様？ まさかと思いますがこの後の御予定は？」

「ん？ 決まってる孫達との楽しい休日だ」

「駄目です。嫌です。許しません」

「なっ、紗羅が斎藤君張りに冷てえ」

「旦那様、ここは二人きりにするというのがも手ですよ」

斎藤さんにそう言われて考え込むじいさん。考え込む振りをしてるようにしか見えない。

「当然、ついて来るのも禁止です。二人きり、二人きりが絶対です」

「チツ、二人きりにしちゃったらよ、正太郎が狼になって紗羅を襲っちゃうかもしれないし」

「同意の上です」

即答したよこの子。もう言い終わる前に被せてたよ。

「いや、獣のように襲われたら嫌だろ？ やっぱり初めては綺麗な思い出の方が」

「しょう君が求めるのであればそれが喜びになり、思い出になりません」

「ちょっと待て！　なんか話が悪い方向というか関係ない方向へ走り出してるぞ！」

「しょう君………私は、いいんですよ？」

潤んだ瞳で俺の頬に手を当ててくる紗羅ちゃん。あれ？なんか、頭がぼーっとしてきた………なんだ、紗羅ちゃんの顔に吸い込まれ

ていくようだ。

「って斎藤さん！ その焚いてるお香はなんですか！？ なんか頭がぼーっとするんですが！？」

「まあ、ちょっとムラムラするだけのアロマですよ、うふふ」

「なんてものを！！」

「しょうくん。ふにゃあ〜……………」

「ちよ、紗羅ちゃん！？ やめて、そんな抱き着かないで」

斎藤さんは撮影の準備に入ってるし、じいさんはいじけてるし、もう嫌だこんな騒がしい生活。

「晴れて良かったです」

「そうだな。絶好のデート日和だ。今日の君は俺達を照らす太陽よりも輝いている」

「おい、愛さんよ、なんでここにいるんだ？」

俺と紗羅ちゃんの会話に強制介入してきた愛。さつきまでは二人………じゃなくて少し離れてるが四人だった。

「休みになんの用だ？」

「それはボクに言っているのかい？ 一週間前のアレ、君のせいでボクの人気はがた落ちた。少しは責任を取ってくれないか？ 紗羅の旦那様なのだろう？」

「しょう君責任取って下さい！」

はいはい、誤解がないように、チャンネルを回して今の紗羅ちゃんのセリフだけ聞いちゃった人に対しても、普通にお付き合い下さっている人にも今の紗羅ちゃんの言葉の誤解を解いておきます。

ただ、紗羅ちゃんは旦那様という言葉だけに過剰反応してるんでしようね、うん。

「紗羅ちゃん？ 俺もさ、別に大所帯で行くのはいいんだよ？」

ちよつとした意地悪、またこの間みたいに紗羅ちゃんが不安定になったら困るから二人きりを考えていたのだが、悉く邪魔が入りやがる。

じいさんと斎藤さんは紗羅ちゃんに気を遣うので、最悪の事態にはなりえないと思っていたが、愛は前科もある。自分が楽しむためには少々手段を選ばない人間なので、紗羅ちゃんには近づかせたくなかった。

学校に入ってからずっと付き合いがあった人間を遠ざけるようにす

るなんて……………俺、紗羅ちゃんの事考え過ぎか？

そんな反対意見が頭の中を過ぎった時、紗羅ちゃんの苦しむ姿が思
い出された。

頭を振った。嫌だ。人があんなに苦しむ姿は見たくない。俺の関係
者なら尚更だ。

「あつ、でも、折角来て頂いた愛さんを帰すのも……………でも、私
は二人きりも……………」

クソ、良い子だった！

俺の気持ちを察してか愛が頬を嫌らしく吊り上げた。嫌な笑い方だ
なこんちくしょう。

「ふむ、流石は紗羅だ。その下心まる見え狼とは違つな。おつと、
すまない、悪く言う気はない。お悩みの紗羅にボクから提案しよう」

「あつ？」

「聞いた話によれば生活用品なんか買うんだろ？ 正太郎じゃ女子
の買い物相手にならんだろう。女の意見もあつたほうが良い。買い
物を午前中に済ませ、午後は二人っきりのデートの洒落込めば良い」
聞いた話って誰から聞いたんだよ。深くはツツコミたくはないが。

「あつ！ 凄く良い提案です！ 愛さんともお出かけ出来ますし、
しょう君ともデート出来ます！」

「だろう？　ボクも君とお出かけは嬉しいよ」

「まったく、誰よりも紗羅ちゃんの事を案じて、紗羅ちゃんに謝罪したのは愛じゃないか。紗羅ちゃんも紗羅ちゃんです。気を遣ってさ。」

「んじゃ、行きますかね。昼飯はなんと俺が奢っちゃおうぞ」

「なんか気分が良かった。こつこつこの積み重ねが大事なんだ。辛くて怖い過去なんてこつこつやって埋めちまえばいいんだ。」

「はあ、やれやれ、男が出すのは当然だろう？」

「肩を竦める愛、それすらも気にならない程気分が良い。」

「あう、しょう君、手を」

「おう！」

「いやあ、気分良いわ。」

「手を繋ごうか」

「ああ！」

「俺の周りの人間は良い奴ばかりだ。少しでも愛を悪く思った俺が恥ずかしいぜ。」

「ってなんで俺の両手が塞がってるの！？」

いつの間！？びつくりだ！

「御祖父様、私のしょう君なんです！ だから手までですよ」

俺は咄嗟に右を見る。

「ぼっ」

頬を赤らめてんじゃねえ！

左手が紗羅ちゃんで塞がってなかったら殴つてるところだ。

「つか、今の流れおかしいよね！？なんで愛じゃなくてじいさんと手を繋いでんの！？なんで紗羅ちゃんはじいさんと手までは許しちゃうの！？」

マズイ、ボケばかりでツッコミが追いつかん。

「ほう、この愛様の手が良かったか、堂々と浮気発言とはやるじゃないか」

「あう……………御祖父様もたまには繋ぎたいかなって思って……………でも、愛さんと手を繋ぎたいとはどういうことですか！？」

「昔は『齋藤さーん、だっこ』と駄々をこねたのに……………」

「孫と手を繋ぐ事も許されんか」

愛は腹立たしいくらいニヤニヤ笑ってるし、紗羅ちゃんは泣きそうになったり怒ったり忙しいし、齋藤さんは本気で凹んでるし、じい

さんはウザいし。

なんで！俺が悪い空気になってんだよ！？

と、この状況では叫べそうになかったので、

「じめんなさい！」

くう、俺がなにしたってんだよ？

「いや、紗羅にはこっちが似合う」

「あら、愛さんのような若人はまだセンスが洗練されていませんね」
すっかり紗羅ちゃんを気に入った愛は、駅前ショッピング街の百貨店に入ってからあれやこれやと面倒みていた。見た目では断然紗羅ちゃんが上に見えるのだが、まるで愛が姉で妹を世話しているだけで、当たり前のような光景だった。二人が笑ってる姿を見ていた俺は満足だった。

でも事件は起こった。

そう、年上女性最強（自称）が二人の間に割って入ったのだ。

「お嬢さんは坊ちゃんを誘惑するんです。ですから、少し肌を見せるのは当然」

「ふん、甘いな斎藤さんは。正太郎の好みは清楚系だ。白は汚れなく清らかさを引き立たせる。よって、露出は最低限、白で攻めるべきだ。なあと、これからもう少しで夏だ。薄着の紗羅にノックアウトさ正太郎程度なら」

「あ、あう……………あう、けんかしないでくださいよ」

服以外の生活用品は大体揃った。荷物持ちに徹してる俺はちよつと離れて三人の様子を見守っていた。

「なあ正太郎よ」

横にいたじいさんが声をかけてくる。いつものふざけた様子はなく、これから何を言われるか、少し不安になった。

「なんで、俺までグスツ、にもづもぢぢせられるかな？」

……………すまんじいさん。俺の両手のキャパ超えちまってさ。これでもいくつか会社を持つ社長やら会長だ。まさかこんなところで荷物持ちさせられるとは思わなかったのだから。

「あそこに混ざって紗羅の服をワイワイキャピキャピ選びてえよお

……………」

そっちか!?

さっき何着か紗羅ちゃんの前に持っていったら尽くあの二人に撃破されてしまったじいさん。見ていて可哀相だった。『今までしっかり生きてきましたか?』『人生という言葉を舐めてませんか?』『ご老体、もう貴方は時代遅れだ』『ふぁいとです』等など、罵倒の末の紗羅ちゃんのフォローが余計にきいたらしく、今は荷物番といったところだ。

紗羅ちゃんに似合う服か、俺は周囲を見回したブティックなんて来たことない俺には、チカチカしてしまって最初は目が慣れなかったが、段々と耐性が出来てきたらしい。

似合いそうな服を見付けた俺は一旦荷物を床に置いて目的の物へ歩いていく。こういうのはフィーリングが大事だ。第一印象でこれと決めた。

「お姉さん、こんなん如何でゲス? ちょっと自信が

「ないわ」

「坊ちゃんもやはりセンスなんてありませんでしたか」

ひでえ、責めて言い切らせてよ。

「これは……………格好いいですね……………」

おっ、紗羅ちゃん好感触。やっぱり本人の意見が大事だよね。

「ほらあ、俺のセンスも捨てたもんじゃ」

「紗羅が正太郎のために必死で褒め言葉を探したのがわからんか？」

「うう………もう何も信用しない。」

「ああ、しょう君床に手をついて落ち込まないで」

紗羅ちゃんが俺の手を取って優しく握ってくれた。細くて、小さくて、白い肌には傷が………

紗羅ちゃんが慌てて手を引っ込めた。

冗談混じりの空気で楽しくやってたのに、胸に嫌なドロドロが流れ込んでくる。

よし！

紗羅ちゃんの腕を掴んで、無理矢理手を引っ張り出して、そつと握った。強く握ったら壊れてしまいそうな手、それについている傷、火傷の痕。

「だからいつも手袋してたんだね？」

ずっと気になっていた。紗羅ちゃんが料理の時以外は外さない指が出る手袋、たまに肘まで布地が伸びてるタイプもつけていた。薄々わかっていたんだ、素肌を見せたくないんだってこと。

「今日は、手を繋ぎましたから………ちゃんと私の手で………」

もう一度ピヨピヨの刑だ。

「ひょうくん！」

「気にするな。ってのは無理だね？ 女の子だし、でも、俺は全部引ってくるめて今の紗羅ちゃんが好きだ。大切なんだ。昔とは違いかもしれないけど、俺は今度こそ君を守るよ」

言っていて思い出してきた。幼少の頃にヒーローに憧れた俺が紗羅ちゃんに言った言葉、とても軽い言葉だった。でも、今は違う。

「しょうく……………ん……………」

紗羅ちゃんが胸に飛び込んできた。本当に細くて小さい、こんな小さな人に重荷なんて背負わせやがって……………今はそんな事を言ってたって状況は変わらない。だから、もう変えさせない。紗羅ちゃんが傷付く未来なんてこさせてたまるか。

「ふむ、良い感じのところ悪いが、周囲の視線が凄いで正太郎」

あつ

「しょう君、私、しょう君が大好きです！」

ああつ……………

恥ずかしい。恥ずかし過ぎる。そしてビデオまで撮られてる。

「ちよっと加工すれば完璧にプロポーズです旦那様」

「うむ、正太郎の誕生日が待ち遠しいぜ」

「やれやれ、賑やかだな」

「よくお似合いです旦那様！」

「そうか！？ いやあ、孫に選んでもらったものだしなあ、今年の夏はこれで決まりだな！」

超がつくほど上機嫌のじいさんが先頭に立って後に俺達は続いている。

「えへ、あうあうあう」

もう歌いだしそつに上機嫌な人も俺の手を掴んで離さない。

「正太郎、あれは先程君が紗羅に選んだシャツじゃなかったか？」

「ああ、女性物だが、肩幅の狭いじいさんだと一番大きいサイズ入ったんだよ」

「にしても本当センスないな、あれを紗羅が着ていたら……ソツとするよ」

こちらからはじいさんの背中が見えているのだが、背中に印字されている文字は「筋肉」正面は「鉄人」腕には「アームストロング」と入っている。

格好良すぎるのかな、まあ、あれは紗羅ちゃんには合わんか。

「紗羅、徹底的に正太郎のセンスを鍛え直さないと後々困るぞきつと」

「あつ……………」

なんで紗羅ちゃん苦笑いなんだよ。あんなに格好良いのにさ。

「紗羅、そろそろボクは帰るよ。午後は予定があつてね、デート、頑張るんだよ」

「もう帰っちゃうんですか？　せめて食事だけでも」

「すまないね。また明日学校で食事しよう」

「あつ、残念です」

「では」

そう言っ行ってしまっ愛、なんか後ろ姿が格好良いな。紗羅ちゃんも、本気で愛の事を慕ってるんだな。素直じゃないけど、根は良い奴だからな。紗羅ちゃんにとってマイナスにはならないだろう。

あつ、この流れで飯奢ってやる予定が。仕方ないな、また今度しよう三人で。

「あら？ クールなペツタンコ嬢ちゃんはどこへ？ ぐえ」

鉄人じいさんのこめかみに何かが飛んできた。床を転がるそれは、十円玉。そういう危ない事は完璧にいなくなってから言わないとな。

「どうやら旦那様は十円らしいですね。そして坊ちゃんは五百円、と」

うわっ、いつの間にか斎藤さんが俺の目の前に、ってノリで俺にまで投げやがったなああの野郎。しかも五百円なんて当たったら痛いじゃないか。

「中々の投擲です。旦那様を守る事が出来ませんでした。やりますね愛さん」

違う、絶対に態とだ。態とじいさんを放っておいたんだ。斎藤さんならなんとか出来そうだし。

「いてて、仕方ない、四人で昼飯といくか。ジジイがどんな物でも食わしちゃうぜ」

「四人？ 旦那様、この斎藤もお嬢さんや坊ちゃんと食事を一緒し

てもよろしいのでしょうか？」

「斎藤君、あまりツッコミたくはないが、そんな遠慮してたのは十ねぎゃば」

「あらあ。何故私の手元の五百円玉が旦那様の眉間に？ 刺客？ 刺客かしら？」

周囲を態とらしく警戒する斎藤さん。どうしてじいさんを攻撃したんだ？昔の話をしようとしたからか？

「ったく、具体的な数字出されて年齢がばれぎゃあああ！ やめて、額の五百円グリグリしないで！ らめえ！」

うわっ、すつげえ気持ち悪い。

「ふふ、本当、夢みたいです。しょう君がいて皆いて、こんな楽しいなんて」

「まだまだ、楽しい事は沢山あるよ。紗羅ちゃんにはもっと笑顔でいてほしいな」

「しょう君。そろそろ卑怯ですよ。もう私しょう君の言葉だけで蕩けちゃいそうです」

「いや、本心で言ってるだけさ。大事な家族みたいなもんだからね」

「え？」

「手のかかる妹が出来たみたいで嬉しいんだ」

「……………え？」

繋いでいた手が離れた。紗羅ちゃんの顔から色という色が消えた。半歩ずつ下がって俺から距離が開いていく。

「……………しよう君？ 私、私は……………わ……………は……………わ……………私、私……………私しよう君が……………わわわ……………あう、あう……………な……………んで……………いやあ……………またなの……………嫌なのに……………」

「お嬢さん！」

異常に気付いた斎藤さんが素早く紗羅ちゃんを抱きしめた。何度も何度も『大丈夫』と声をかけている。紗羅ちゃんはぶつぶつとずつとなにかを呟いている。

「え、あの紗羅ちゃん？」

「いやあ！ やめて、ぶたないで……………いたいのいやあ……………」

「そ、そんなことしないするもんか、俺だよ正太郎だよ」

「いやあ……………助けて……………助けてしよう君……………」

「だから……………」

右頬に衝撃。あまりの力に尻餅をつく。頭が真っ白だ。一体何が？
なんで？

「大丈夫だよ。紗羅にはじいちゃんがついてるからね」

殴られた？

じいさんに？

初めての経験に頭が真っ白だ。なんで紗羅ちゃんはあんなに怖がってるんだよ、俺はなんで動かないんだよ、なんで、動けないんだよ！

クソ、ちくしょう、紗羅ちゃんが泣いてんだぞ。

「しょう君、しょう君しょう君……紗羅怖い、紗羅守ってくれ
って……石……石は？ 石がなきや……石はどこ！？」

「はいお嬢さん、大丈夫ですから、怖いなんて斎藤がやっつけて
しまいますから。すぐに坊ちゃんも来てくれますからね」

「石だ……石、本当！？ しょう君くる？」

「はい、ですから落ち着いて、良い子にしてください」

「うん、良い子にするよ」

まだ百貨店の中だ。レストランのフロアと言ってもまだ人がいる。
周囲の視線がある。喋り声が聞こえてくる。

なんでだよ。

なんで、紗羅ちゃんには俺が映らねえんだよ。

「旦那様、私はお嬢さんを」

「おう、正太郎は任せな」

何も、わかんない。俺が、俺が……………

「立てよ正太郎、ほら、行くぞ」

じいさんに無理矢理肩を担がれて、そのままエレベーターまで連れていかれた。紗羅ちゃんも違うエレベーターに乗って。

「正太郎、どういっつもりだ？」

「どういっつもりって……………俺は」

「テメエが言ったのは言っちゃいけない言葉だ。それは分かるな？」

諭すように、教えられる。語調は強くなく、優しい。

「お前の事だから言葉にしてはつきりと言いたかったんだろう。お前の父親と一緒にだな。だがな、お前の父親も人が傷付く真実は黙ったさ、優しい嘘つきになったださ。お前は……………」

じいさんの語調が少しずつ強くなる。

車に乗せられ着いたのはじいさんの家。今はバカみたいに広い和室、じいさんの部屋にいた。

じいさんはその中心にある机の前に座っていた。俺は座る事も出来ず呆然と立っている。

「お前も分かったみたいだし、それに、殴ったのは、その、悪かった」

「……………甘いよ」

「ん？」

「じいちゃん甘いよ……………俺、自分で言ったのに、守るって言ったのに……………俺、最低な事したんだよ！」

最低だ。分かってたのに、傷付くの分かってたのに、ハッキリさせなきゃ余計に傷付けるって思ったから、俺は……………クソ、なに自分を正当化しようとしてんだよ、俺は悪い事をしたんだ、悪い事をした。

「じゃあ歯を食いしばれ！」

え？

後ろからかかった声に振り返ると、

「ぐつつつ!!」

意識がぶっ飛びかけた。左頬に受けた衝撃は異常だ。畳の上をゴロゴロと転がってしまふ。

そして殴った主は、マウントをとって、

「このクソ息子が!」

バキッ、ドカツ、ゴキッ、って感じの擬音が俺の頭蓋骨や顔の骨で打ち鳴らされていく。

「しよ、晶子さん!?! ちよちよ、ちよつと待ちなさい! 正太郎が、俺の孫が貴方の息子が! 痙攣してる、待って、俺が悪かったから許してやって! 正太郎が! 正太郎があああああ!」

鳴り止まない骨の合奏。

「ん?」

母さんの両手を押さえた。

「.....」

「なに睨んでんだ!」

まだ謝る前に死ぬわけには.....流石はお母様、頭突きとは

『ねえねえ!』

『……………なに?』

初めて声をかけた。ずっと本を読んでつまんなそうにしてる女の子の声はとっても綺麗だった。

それが一番最初に思った事。

『なんでご本読んでるの?』

『つままないから』

『じゃあ僕と遊ぼうよ』

『嫌よ。あつちで騒いでるあの子達でいいじゃない?』

大部屋の中心でワイワイとやってる大人の近くで何人かの子供が遊んでいた。

『でも僕は君と遊びたい』

『なんでよ?』

顔が凄く嫌そうだった。

『だってパパが言ってたもん。一人ぼっちは良くないって』

『なに？ 馬鹿にしてるの？』

『馬鹿にしてる？ それってなに？ どーゆう意味？』

嫌そうな顔は更に深まった。

『私と遊んだってつままないわ』

『そんなことないよ』

『え？』

少し嫌そうな顔が弱まった。

『だって遊んでみないとわかんないもん。パパも友達を選ぶものじゃないって言ってた』

『パパが……………良いわね、パパがいて』

『？ パパいないの？』

（今思えばこの言葉がどれ程残酷な意味を持ったか分かる。当時の僕と自分を呼んでいた俺をゲンコツ一発で怒りたい。）

『こんな所にいたか、おっ、可愛い女の子じゃないか』

『パパ！ うん、僕友達になったんだ』

『なっ、誰がお前なんかと友達だ！』

『え？ 友達になろうよ。僕は、ひむ、かい、しょうたろうだよ？』

『あっそ』

僕はじっと見つめた。

『……………なかじょうぞう』

『うん、さらちゃん』

『やるなあ、よしパパと遊ぼうか正太郎、紗羅ちゃん』

『良いの？』

『もちろん！ よーし、二人とも持ち上げちゃうぞ！』

僕とさらちゃんはパパの肩に乗せられて庭まで出て行った。

「……………いつっ」

「あつ、大丈夫ですか！？ しょう君？」

「紗羅……………ひゃん？」

あれ？凄く喋りにくい。顔いてえし。

「つて！ 紗羅ひゃん。ほれ、ほめん、ほれはひゃらひゃんのほと
！」

「しょう君落ちて着いてください！ 何を言ってるかさっぱりです」

「ほめん……………つて、紗羅ひゃん！？ ほう、はいじよふなほ
？」

「はい、もう大丈夫です……………嘘です」

嘘？大丈夫じゃない？

俺は跳び起きて紗羅ちゃんにつかみ掛かる。

「ほめん！ ほれ、うはくいへはいへど、紗羅ひゃんが好きは！
かわひひし、気立へもひいし、おへにはもっはいない！ へも、も
っほ紗羅ちゃんを知りたい！ もっほおへをひってほしい！ ずっ
ほ好きだったから！」

言いきった。なんて言ってるか自分でもさっぱりだが、紗羅ってと
こだけしっかり発音出来る理由もさっぱりだが、言った。

「まだ恋愛的な好きかもわからないんじゃないんですか？」

気持ちだけは伝わったようで、紗羅ちゃんは要点だけ返事してくれる。俺はそれに隠してもしょうがないので素直に首肯した。

「でも、私の事好きなんですよね？」

「もひほん！」

もちろん、もちろんだからね。

「なら話は簡単です」

「へ？」

紗羅ちゃんに押し倒された。そこでさっきまで俺が寝ていたのは布団で、恐らくじいさんのお屋敷内の一室である事がわかった。にしたって広い、畳が敷き詰められているが、何畳あるのか数えるのが面倒なくらいだ。

うん、本当じいさんは凄いな。っていうくらい紗羅ちゃんと触れ合った場所がいてえ！違うこと考えてみたけど洒落になりませんよね。

「しょう君をメロメロにしちゃえばいいんです。わ、私はもうこれ以上にないくらいメロメロですけど」

「まっへ、紗羅ひゃんまっへ！」

「待ちません。もう二度と恐い思いはしたくありませんから、素敵なしよう君を誰かに取られる前に！」

「あっ……………」

泣いてる。そうだよ、さっきまであんなに傷付いて、泣いて、恐がって、俺また感情任せで大失敗するところだった。

俺は紗羅ちゃんを抱きしめた。

「しよう君……………」

俺の上に乗っかってる紗羅ちゃんと視線が合う。

「俺、絶対に、紗、羅ちゃんを、守る、よ。二度、と、この約束、破らないから、でも、俺、馬鹿だから、嫌な、事は、嫌と、言っつてやっとなんか分かった。顎殴られた時に舌を变形させるくらい噛んだんだ。舌が異様に痛い、でも、ゆっくりと言葉にしていけば喋れる。これだけはしっかり言いたかった。」

「これ以上私を好きにさせてどうするんですか？　もう、一時だつて離れられなくなっちゃいます」

そう言った紗羅ちゃんの顔が迫ってくる。

「いつっ」

「もう、私をいじめた仕返しです。大好きですよしよう君」

頬に触れた感触は腫れ上がり過ぎてよくわからなかったが、唇がし

っかりと触れたのは見えた。

紗羅ちゃんは俺の胸に顔を埋めて、更に強く俺に抱き着いてくる。

「ここでなら、悪い夢も見ないですね」

そんな咳きが聞こえた時、俺は安堵感に満たされて暗闇に落ちていった。

三話

深深と雨が降っていた。集中して見ると周囲の喧噪が嘘のように消えた。俺はただ、雨が降る様だけを見続ける。

梅雨というだけはある。ここ最近雨ばかりだ。こんなんで来週の球技大会は大丈夫だろうか、野球を選んだ俺だが、別にそんな運動神経良いわけじゃないし、ま、足引っ張って目立たないようにのんびりやってやり過ごせば良いでしょう。

「しょう君!」

「ん? どつたの紗羅ちゃん」

我等が大事なお姫様、中城紗羅ちゃんの登場だ。お姫様の騎士である俺は座りながら恭しく一礼した。

「さつきからずっと声をかけてるのに窓の外ばかり見てました!

あう、嫌われたかと思いました」

「ああ、ごめんごめん。少しほうげちゃってさ」

もう早いもので、紗羅ちゃんが転校してきてから一ヶ月が経った。学校にも、周囲の地理にも慣れてきた紗羅ちゃん。初日から悶着あったが、紗羅ちゃんの性格の良さにそんなものどこへやら。愛のおかげもだいぶあるのだろう。今ではクラスのマスコットのようだ。

あの発作も危なげな状況はあったが、愛と俺でなんとか出来ていた。やっぱり女子の愛がいてくれるのは助かる。そうでなくとも愛は優

秀だ、愛が紗羅ちゃんと仲良くしてなかったら、と思うと恐くなる程だ。

「あう、しょう君女の子の事考えてます。愛さん辺りの事」

紗羅ちゃんが睨んでくる。睨んできてもう少し愛らしさが残ってるからなんの威圧感もない。

「愛の事なんて考えてないよ。今日の晩御飯になくなって？」

最近思うところがあるのでちょっと誤魔化してみた。

「目を見ればわかります！ しょう君はわかりやすいんです……………後、晩御飯は鮭を焼こうかと」

そう、最近目を見られると俺の秘密が大体ばれるのだ。

俺が部屋に大事に隠しているパジャマカタログは綺麗に女性が着ているページだけ消滅し、メンズしか読めない状況にされる。なんて酷い事をされてるか君達に分かるか？俺の癒しであり、潤いであり、安らぎであるパジャマを……………まあ、紗羅ちゃんが日替わりで色んなパジャマを見せてくれるから結構満足してるけどね。

「球技大会紗羅ちゃんはなににするんだっけ？」

「もう、球技大会の事に思いを馳せるのは良いですが、明日からテストなんですよ？ 本当に大丈夫なんですか？」

そう、今こうして紗羅ちゃんが自由に席を立って俺が座っている席の前の林田さんの席に紗羅ちゃんが座っている理由はそれだ。テス

ト、もうこのカタカナに腹が立ってくる。日本人が受けるんだから日本語であれば良いのに、

「しょう君！」

「はい、余計な事考えてましたごめんなさい」

「はっはっはっ、また正太郎の勉強の世話かい？ 紗羅も諦めたらどうだい？ これには勉強に勤しむ心もそれを積み重ねる脳力もな
いよ」

脳力だなんて気取った言い方をしゃがって、どっかのテレビの企画かよ。

今、本来なら授業時間なのだが、今日最後の授業は先生が不在という事で、テストのための自習となった。

俺の頭は下の上、正直前回の進級もギリギリだった。出席日数じゃなくて、真面目に出席して成績でギリギリは珍しい、授業態度だつて寝てるわけじゃないのに、ってな感じの褒めながらけなされる説教を受けた。

「わかってます。でも、この六月中間試験と来月終わりの期末で赤点を一つでも取ったら夏休み補習なんですよ？ せつかく夏休みは御祖父様の別荘に二人きりで旅行の予定がたっているのに」

分かってるんかい、少しはフォローとか……………ないぐらいの学力
と思ってください。

つて！驚愕の新事実だ。テストを試験つて言えば日本語じゃないか！すっげ、紗羅ちゃんすっげ！

「……………正太郎、なに『テストってカタカナを試験って言えば日本語になる』って感じで驚いてるんだ」

「め、愛さん……………お知恵を貸してください、このままじゃあ」「ふむ、紗羅に泣き付かれては聞かないわけにはいくまい。なあに、こいつにだって頭はある。パジャマのブランドやパジャマの正式な商品名やら変態的などころでは良い記憶力を発揮するから、それに結び付けてやればいい」

「……………しょう君、テストで赤点を取らなかつたら私と愛さんの夏用の薄地新作パジャマをお披露目します」

……………なに？『薄地』だと？

薄地、そう、夏場に向けてのちょっと薄いパジャマ。保温性と吸水性を追求したパジャマ、それを薄くする。まるで神への反逆ともとれる行為だが、夏場だ。夏なんだから薄いのは良い、薄いのは良い、肌のラインがよく見えるから良い！あれ？夏なんだから、の後あたりから感情に飲まれてる。

「つまり、ネグリジエ……………って事かな紗羅ちゃん？」

「あう、ネグリジエを着るのが一瞬で看破されました。ネグリジエはお嫌いですか？」

「とんでもござあせん！」

やべ、テンション上がり過ぎて全部声が裏返った。

「たしかにパジャマニアの中にはネグリジェを邪道とする人はいる
そうですが、あれだって寝巻、あの透けた感じはまさに蠱惑！ も
う翻弄される自信があるねネグリジェに」

例えるならパジャマは純愛、甘酸っぱい青春と恋愛って感じだ。逆
にネグリジェのエロさは、もう翻弄されるような大人の恋、綺麗だ
けではない、苦さや辛さをつけた味のあるものだ。

「ふむ、いきなり普段使わない、もとい、使えない言葉を使いたし
たかと思えば内容がこれでは………だが、やはりパジャマのため
となるとこれだけの力を発揮できるようだな」

となんか分析している愛、さっきさういえば愛もパジャマのお披露
目に入ってたけど、本当に着るのか？

「いや、着ない」

まだ声に出してないのに返答ありがとう。紗羅ちゃん以外のパジャ
マも見てみたかったのに。いくら胸が薄くても相手をドキドキさせ
る事ができるパジャマはやはり偉大だ。

「……………お願いします」

「あれ？ 紗羅ちゃんどこに電話してたの？」

俺の言葉の後妙に静かだと思ったら紗羅ちゃんは携帯電話で誰かに
電話していた。と言っても、紗羅ちゃんの携帯電話のアドレス帳に
は俺と愛と母さんとじいさんと斎藤さんのしか入ってないから、残
りは三人。更にそのうち二人は大体行動を共にしているから実質二
人だ。

まあ、じいさん達で間違いはないんだが、ここは言わねばならない。大事な事だ、これから紗羅ちゃんが生きていくのにとても大事な事。

「今ネグリジエを頼んだんだよね？（また無理を言ったんだね？）」

「って事は俺に着て見せてくれるんだよね？（あんまり権力をそういう使い方しちゃいけないよ）」

「あつ、もちろんしょう君には隅から隅まで触るのもオツケーですよ」

さつきからの男達の熱い視線が更に強く俺を焼いている。

「肌触りなんかを確かめても良いってこと！？（だから、じいさんを頼るのはいいけど、頼りすぎもよくないよ）」

……………うっ。

「あれ？　しょう君どうなさったんですか？」

「まあ、自分の言いたい事と本能がぶつかりあって、本能が圧倒的過ぎてへこんでるんだらうよ」

俺、そんな寝巻好きか？

好きだ。

即答だよ俺の本能。

「あう！ 本題に戻しますと、お勉強しましょう！」

この最後の『お勉強しましょう！』がまさかあの事件の引き金になるとは

「あう、無事に試験も終了。しょう君は赤点なし、完璧でしたね！」

「え？」

「まさか赤点回避出来るとはな。パジャマで学習、ドキッ、はだけちやう、が功を奏したな」

「はい？」

「今回はしょう君からのお礼って事での食事ですからね。愛さん、本当に、本当に特別ですからね」

「うえ！？」

「はは、わかってるよ。全く、正太郎と二人きりに最近なれないな」

「ぬうえ？」

「もう！ 二人きりなんてダメです。私がいなきゃ許しません」

「ぷおい！？」

「そろそろ相手をしてやろう。いくらファーストフード店と言えど、テンションがおかしすぎて視線を集めだしている」

いや、あのさ、引つ張ったよね？なんかこの後の展開を仄めかす感じで引つ張ったよね？

んで！なんで！試験終わっちゃったの！？

「あう、なんか口をパクパクと開くだけで声が出てません。でも何と無く言いたい事は分かります」

苦笑いしながら紗羅ちゃんがそんな事をおっしゃってくれる。涙が出るほど嬉しい、これで、俺はこの謎の恐怖と戦う事が出来る。

「赤点回避のご褒美のパジャマですよね？」

「違う！」

やっと声が出た。目を見れば俺の考えてる事分かってくれんじやないのか！

「いや、テスト！ 試験！ 勉強とか！」

「あつ、しょう君勉強のしすぎで頭が故障しましたか？」

「してないんだ！ 勉強！ 俺！ 試験も！」

「落ち着け正太郎。紗羅も恐がっている。試験は終わったじゃないか、全く、珍しく人が褒めているというに壊れるなよ」

ジュースに口をつけて愛が嘆息した。

紗羅ちゃんは苦笑いを顔に貼付けたままだ。

俺か？俺が悪いのか？間違ってるのは世界だろ？俺は必死で足掻いて生きてるんだ。

そしてなんで知らぬ間にこのバーガーセットやらナゲットやらが俺の奢りになってんの！？財布を出したっけ？

「本当本当、全くしつかりしてくださいよ」

そう言つてポテトを掴むメイド服の女性。髪は長くないが、女性っぽさがなくなる程には長い。セミロングってやつか。メイド服のため周囲から浮きまくってるが、彼女だけを見るとメイド服がこれほど様になるのは斎藤さんとの人ぐらいだろ、と思える。

「あつ、ナゲットも貰いますよ」

「……………っ！」

愛が動いた。動いた、とやうに、あまりに速くて愛がどう動いたか

説明出来ない。四人で座る席で、俺の隣は紗羅ちゃん、俺の向かい
は愛、そして愛の隣に謎のメイド服、愛は隣を奇襲したわけだ。

「ほいほい、おいたはいけませんよ」

愛は目を見開いている。メイド服は口にナゲットを銜えたまま愛の
両手を掴んでいた。

「貴女、何者です？ 今までは完璧に気配だつてなかったのに」

え？ やつぱりそうなの？ てっきり俺の抜けた記憶の中で知り合った
変人メイドかと思ったよ。

「鉄槌！」

「にゃふっ！」

文字通り、文字通り鉄槌が謎のメイドの頭に下ろされ、聞くと寒気
がしそうな鈍い音が発生した。

「斎藤さ〜ん、流石に鉄槌はモノホン使うべきじゃないですよ」

「おいたしてるのは貴女です。坊ちゃん専用、なくしてもいいので
すよ？」

「ええっ！？ そんな殺生な！ あんなに辛い訓練抜けて、やっと
許されたのに、そんなの嫌です」

「なら許しなく主と席を一緒に、なんて茶目っ気でもやめなさい」

「はい」

唇を尖らせて立ち上がるメイドさんと、それに鋭い眼光を送る斎藤さん。

「斎藤女史の知り合いでしたか。なるほど、ボクが見逃すわけだ」

「あなたもいい動きでしたよあいた」

もう一度メイドに鉄槌が振り下ろされた。

「調子に乗らない。愛さん、申し訳ありません。彼女、若輩ではありませんが、能力だけは高くて」

「ええ、驚いただけですから大丈夫ですよ」

なんか俺と紗羅ちゃん置いてきぼりだけど、なんなんだろうこのメイド服がファーストフード店にいる状況は。

「坊ちゃん、テスト、お疲れ様です。この度赤点回避のご褒美として、旦那様より彼女が貴方の専用になりました。使い方はこの斎藤と違いはありません。能力もそれなりに有能、上手く使ってやって下さい」

恭しく腰まで折って頭を下げる斎藤さん。つまり、要約すると、それってことは？

「あ」「どもども、葵です。葵ちゃんって呼んで下さい、まいりますた」

「えっ。」

「絶対に認めません！」

「いや、そこをなんとか！ 頼むよ紗羅！」

と、紗羅ちゃんにしがみついてまで懇願するじいさん。俺はそれを、哀れに見えてきた、なんて考えながら見ている。

「ご主人、奥様、コーヒーはホットおあアイス？」

と聞いてきたのは葵ちゃん、というか年齢的には葵さん。今日は珍しく母さんも家にいる。団欒だ、と叫んだじいさんは鍋（夏が近いのに）の準備をして意気揚々と家に来たが、葵さんの事を認めないと強く紗羅ちゃんに言われてこの調子だ。

葵、とだけ名乗ったメイドさん。じいさんの説明によれば、今後俺、日向正太郎にはじいさんの会社のそれなりのポストにつけるといふ考えがあり、これまでそういう教育を受けてなかった俺に優秀な補佐役が必要だ、という事で葵さんが俺の専任になった。

とだけ言われても、俺は生まれの理由からじいさんの会社で世話になる気はないし、葵さんも、そんな俺には全く必要のない人だ。

はてさて、口があまり上手くない俺が下手な事を言えば斎藤さん辺りに簡単に丸め込まれてしまう。とりあえず、紗羅ちゃんの成り行きを見守りつつ、上手い言葉を探した。

「だから、しょう君には私があります。必要とあれば私が葵さんの役を完璧にこなしましょう！」

「いやね、紗羅だって家事とかあるでしょ？ あんまりじいちゃん的には良くないかなあ、って」

「しょう君に女性が四六時中ついてるなんてふざけないで下さい！」

「いや、だからね」

「じいさん。俺はじいさんに仕事貰う気はないぞ」

じいさんがこつちを見る。ああ、多分チユパカブラに遭遇して襲われた人はこんな顔して死んでくんだろなあ、って顔して驚いている。

「あのな正太郎、今の就職難のご時世でコネがあるのがどれだけ恵まれてるか分かってるか？ いや分かってないな。コネ、コネクションだぞ？ コネクションなのは知らんが、なぜ恵まれた状況を自ら捨てる？」

なんかすんごい馬鹿にされながら諭されてる。もう目が幼稚園児を

見るようだぞこのジジイ。

「はいはい、仕事の話云々を差し引いても私はご主人様に仕える気
でいます。紗羅様のお役にも」

「うん、私は賛成だ。このヘナチヨコにしっかりした人がついてな
きゃ無理だ」

葵さんの言葉に割って入ってきたのはずっと黙っていた母さんだ。
母さんはえらく真面目な顔で（元々目つきも悪いし、真面目か怒っ
てるかしか見えないが）言い切った。

やっぱり母さんの意見ともあって、紗羅ちゃんは驚愕、しながら器
用に泣きそうになっている。じいさんは予期せぬ助け舟に諸手をあ
げて喜びそう。

「で、でも」

「嫁よ。そんな女が張り付いたくらいでそっちの尻を追い掛けるよ
うな息子だったら私は……………握り潰す」

何を！？俺を！？俺自体をか！？

母さんならなんとかしそうで嫌だ。

「少しは私の息子を信用してやっては貰えないだろうか？」

と言って座りながら頭を下げる母さん、もちろん紗羅ちゃんは、

「い、いえ！あの、頭を上げて下さい。私は、私は……………信

用しますから、しょう君を」

あれ？意見が、俺の意にそぐわない方向に。

「なら正太郎には葵で決定だな。うん、葵君と呼ぼう」

「いえ、葵ちゃんです」

おかしいな。さっきから葵さんのじいさんに対する態度、目つきや口調が悪い。一応、じいさんは葵さんにとって上司とかそういうのすら越える最も重要な人じゃないのか？

「そうか、なら」

「やっぱり呼ばないでほしいです。私、貴方が……………」

その瞬間俺の背筋は凍り付いた。

理由は分からない。体が勝手に反応して、数秒間指一本動かせなくなった。

「あんまり、調子にのらないほうがいい」

声を聞いても体が冷える。暑いはずの気温がこの部屋からは消え去り、冷蔵庫の中のように感じた。

「あれ？ 斎藤さん、私、貴女も好きじゃないですよ？」

主人への罵倒に、斎藤さんも抑え切れなかったんだ。銀の食器が葵さんに向けられ、葵さんはそれを握り締めている。形から察するに

フォークかスプーン、って！

「斎藤さん！　なんてことするんだ。切れちゃってるよ手が」

俺は立ち上がって、二人の間に割って入り、葵さんの手を無理矢理開いた。フォークで切ったのだろう、手の平には一文字が入っていた。

今まで斎藤さんが磨いていた物だが、やっぱり心配だ。とりあえず蛇口、水で流して消毒して絆創膏……………じゃ無理だ。傷口が広いから、大袈裟だが包帯？　なにかで……………

「正太郎君、お姉さん、やっぱり君が優しい子になって嬉しいな」
葵さんがじいさんにも斎藤さんにも向けなかった優しい目で俺を見て、切っていない右手で俺の頭を撫でてる。

……………あつ。

「あお姉ちゃん……………？」

「やっぱり、忘れてたんだね。全く、あれだけ私に『好き、あお姉ちゃん大好き、結婚しよ』って言ったのに」

そう言って微笑んだ女性の手を握りながら俺は動く事が出来なかった。

葵。葵とだけしか呼ぶ名はなく、昔、俺の側にいてよく遊んでくれたお姉ちゃん。

いつも笑顔で、あの頃の俺の手を引っ張って……………

そう、毎日死ぬ思いをした。探検と称し山の中に入り俺を置いていたり、冒険と称し川に俺を叩き込んだり、修業と称しておお姉ちゃんを積載したりヤカーを5キロ程引かせたり……………小学生にやらせる事じゃないだろ！

「な、なんでおお姉ちゃんが俺のお手伝いになるんだよ」

「え？ 楽しいからに決まってるわ」

あっけらかんと言いつつ。てか即答だよ。

この笑顔、あの時と一緒にだ。俺をボロボロのズタズタのグチャグチャにした昔と。

「お義母様の言葉がなければ認めませんでした。後！ 『おお姉ちゃんとお紗羅ちゃん、皆が好きだから結婚したい』とも言いましたからね」

「まだ認めてないくせに、それと、結局私の名前が前でしょ？ やっぱり私のほうが」

「しょう君！」

「俺は、紗羅ちゃんの方が好きかな」

頑張った。俺頑張った。かなり恥ずかしいが、大切な事を言った。少しづつこつこつという事態に免疫をつけていつてる紗羅ちゃんだけど、もしもの事態がある。

それに、比較したら紗羅ちゃんの方が好きなのは嘘じゃない。

「あつ……………あつあつあつ……………あつ」

ヤバイ、なにがヤバイってどうやら紗羅ちゃんには刺激が強すぎたらしい。完璧に壊れてしまった。

じいさんは葵さん、もとい、あお姉ちゃんの敵意に堪えられなかったのか鍋の用意だけして帰ってしまった。もちろん斎藤さんも。そして母さんは、

「奥様も大変ね、こんな時間から仕事だなんて。そんなに頑張るからヘタレが育っちゃったのかしら？」

こちらをニヤニヤと、嫌らしい笑みで見てくる。あお姉ちゃんの言うことは尤もだ。俺はなにも成長してない。紗羅ちゃんの事も中途半端、母さんに無理させてるのは分かっているのにバイトすらせず、日々を楽しんで生きている。

反省してる。こんなんじゃない父さんのような男になる、これが夢のまた夢の妄想だ。

分かっていても行動を起こさない俺に苛立ちもある。

「……………俺寝るよ」

「ちょっとは男らしくなつたかと思つたのに。成長してるのは体だけ？ お姉さん、なんのために正太郎のところに戻つてきたの？」

なんのために戻つてきたの？なんて知るかよ。向ここの言い分が正しすぎてなにも言い返せやしない。

「悔しいとも思えないんでしょ？ 明日になったら学校行つていつも通り。やめたら？ 少しは格好つけなよ？ 紗羅も愛想尽かすよ？」

「いい加減してください！ 貴方に日向正太郎のなにが分かるんですか！？」

やめてよ。紗羅ちゃんやめてくれ。

「分かるよ。親の事なんて考えず、じいさんがいるから最悪の事態にはならないや。簡単だよ、楽だよ。きつと死ぬまでそうなんだよ。じいさんに仕事なんてもらわない、なんて大それた事言える立場じゃないのにさ」

「あつ、やめて下さい！ しょう君には良いところ沢山」

「やめてくれ！ それ以上言つたつて、俺が惨めになるだけだ……………」

「あつ、しょう君……………大体、文句を言いに来たんですか葵さん！？」

「ん？ んなわけないじゃん。正太郎のお父様、私の旦那様の遺言よ。『正太郎はきつといい男になる。もし、葵が大人になった時、正太郎がいい男になれてなかったら、その手助けをしてやってはくれないか？』ってね。私、なんだかんだで貴方を弟みたいに思ってるし、きつと好きなんだね」

昔の葵姉ちゃんとは違う大人の笑顔だ。

そして今やっと分かった。何故あお姉ちゃんが一緒に暮らしてたか、俺の父さんのお手伝いさんだったんだ。

「あつ……………私は」

「もちろん弟としてね、紗羅も妹みたいに思ってるし、紗羅の事は心から応援してるわ。でも、どうせなら格好いい正太郎がいいでしょ？」

と言って紗羅ちゃんの頭を撫でるあお姉ちゃん。

「しょう君は、しょう君は格好いいです。元から！」

紗羅ちゃんが俺を評価すればするほど俺は惨めになる。その評価が高ければ高いほど実際の俺は陳腐になる。

情けない。全部情けない。

「なに？ バイトしたい？」

次の日、学校で愛に相談してみた。とりあえず、とりあえずというのもおかしいかもしれないが、働いて金を稼ぐ、これをしなきゃと思った。

「ふむ、そうなのなら……………お前のじいさんでも頼ればいいじゃないか」

「駄目だ。じいさんは頼りたくない」

「そのような意地を……………ふむ、まあ知り合いにあたってみよう。だが期待するなよ」

「ありがとう」

「お待たせしました。あう、食べないでいてくれたんですね」

紗羅ちゃん登場。現在お昼休み、紗羅ちゃんは職員室に呼び出されて昼休み早々に教室を出ていて、10分程経った今御帰還だ。

「ああ、ボクは早く紗羅の弁当を食べたかったのだが、正太郎がどうしても紗羅ちゃんを待つと言っただけ。それと、ボクの分の弁当

までありがとう紗羅」

「あう、愛さんには大変お世話になってますから」

今日は、今日も俺は紗羅ちゃんが作ってくれた弁当だ。

「……………紗羅ちゃん？」

期待に胸膨らまして弁当箱をあけた俺に驚愕と胸に風穴があく衝撃が走った。

「あう？ どうしましたか？」

「弁当箱、空だよ？」

「あう！ 大変です、でも、今日は紗羅お腹が減って自分の分を多めに作って、尚且つお箸が一本しかありません！」

もう魂胆見え見えの説明台詞だ！

今日の紗羅ちゃんの弁当箱を見ると、育ち盛りの男用に少し大きい俺の弁当箱の二倍はありやがる。

「あうー、なんてことをしてしまったんでしょう私は。これは私と分け合って食べるしかありません！」

うわ、うわ、マジでこの娘さんやる気だ。俺を落とすと言ったのは伊達じゃないらしい。

「はい、まいりますたあ」

と机に出現したのはいつも俺が使ってる少し大きめの弁当箱、と綺麗な白い手、それに沿って腕を見て、その手の人を見た。

「はあい、お困りかと思ひまして私余計な事しちゃいました」

言っておく。誤解ないように『しちゃいました？』じゃない『しちゃいました』と自分で余計な事をしてると分かってるんだ。だって紗羅ちゃんに対してすんごく嫌らしい笑みで笑ってるもん、あお姉ちゃん。

「あう、葵さん、なんで私の邪魔するんですか？」

睨んでる。これ以上にないくらい敵意をあお姉ちゃんに向けてる。

「私、紗羅様も立派なレディにしなくちゃなんで」

「話が繋がりません！」

「立派なレディになればまいりますたあとの結婚を認めます」

つか『まいりますたあ』って呼び方固定なの？

「いや、あう……………邪魔しないでよ……………」

マズイ！これはマズイ！

俺は焦って席を立ち紗羅ちゃんに寄ろうとするが、あお姉ちゃんに阻まれた。

「そうやって、それで、そんな事で、正太郎の気を引きたいの？
ざっけんじゃないわよ、正太郎の甘さに付け込んでるだけの最低女
じゃない。昔の紗羅はもつと純真に正太郎を思ってたわよ」

葵さん、じゃなくて本気のおお姉ちゃんの言葉。

紗羅ちゃんは体を震わせて自分を抱くようにしてうずくまっている。
愛が側に寄り添ってはいるが、震えはいっこうに止まらない。

嫌だ。こんなの嫌だ。

「やめろよ！ 弁当箱ありがとう。部外者なんだから帰ってくれ
かな」

初めてかもしれない、おお姉ちゃんにこんなに敵意を持って接する
のは。ケンカしたことはいくらでもあったけど、それでも仲がいい
故だ。今は違う。

「ふーん、良かったね紗羅、正太郎の同情は引けたみたいよ。これ
が恋愛感情になったって虚しいだけだと思っけどね私は」

最後に紗羅ちゃんが余計に震える言葉を吐いて、おお姉ちゃんは教
室を出て行った。

すっかり注目的になっていたので愛想笑いを浮かべて、俺は紗羅
ちゃんに近付いた。

………やっぱり泣いていた。また、また俺の前で泣いている。
俺が手が届く距離で紗羅ちゃんが、泣いている。

「紗羅、ちゃん。俺、違うから、同情とかじゃないから、絶対に」

俺はそれだけ伝えて教室を出た。

走る。端から見たら逃げ出したように見えただろうな、そう思いながら走る。

そして、

「あら？ まいますたあ、出てけって言ったのに追ってくるとはど
ういづ了見ですか？」

完璧に『葵さん』になってるあお姉ちゃん。

「出てく、外で話をしよう」

「学校おさぼりはいけませんよお」

「いいから行こう！」

あお姉ちゃんの手を無理矢理取って前を歩く。って前から！

「おや、日向んこのメイドか」

理事長オオオーツツ！

「ええ、ババアさんですよね？」

あお姉ちゃんうおうーツツツツ！……！

俺の職業が明日からフリーターとかニートになっちまうよオオオオオオオツツ！

「ふん、日向んとこのはどいつもこいつもムカつくね。その坊主のほづが弁えてるよ」

「ええ、唯一の特技が小心者ですからねこの子は」

恐い、もう次いつあお姉ちゃんが爆弾を起爆させるか恐いよ。

「ったく、坊主学校出るんなら私が言っといてやる」

ああああ、ああああああああああ。

つまり?????僕はもういらぬ子なの？私は俺は？学校を出されちゃうの？退学？じいちゃんのおお姉ちゃんの、

「せいだからな！！俺悪い事してないのにグボツ！」

「落ち着きなさいよ小心者。さっきの会話聞いてたんでしょ、大事な話と察してくれたババアの計らいよ」

拳槌打ちをくらった後頭部を押さえてババア、じゃなかった理事長を見る。

「なに泣きそうな顔してんだい。自分の息子を早々自分から捨てる親がいるかい。アンタを庇う事はあっても切り捨てることはしないよこの学校にいる限りはね」

やべえ、なんて格好いいババアなんだ。

「ありがとうばあちゃん！　じゃなかった理事長」

「ったく、日向って苗字は退屈しないね」

「話ってなによ？　とゆうか、なんでこんな場所で話を？」

「アナタが坊ちゃんに危害を加えかねませんか」

と斎藤さん。

校門を出た瞬間に張っていた斎藤さんや、他のメイド服の女性や男性に無理矢理車に押し込まれた俺達はじいさんの屋敷にいた。

「ってメイド服の男性はなんだったの！？」

聞かなきゃいけない事を斎藤さんに聞いた。

「メイド　イです」

「メイドガ　？」

「伏せ字を一瞬で無効化しましたね坊ちゃん」

そして、奥の襖から着物を着たじいさんが現れた。

「すまねえな、ご足労」

「あれは拉致よ」

とおお姉ちゃん。じいさんは苦い顔して斎藤さんを見る。斎藤さんは相変わらずの澄まし顔。

「坊ちゃんと手を繋いでる時の葵はとても隙だらけだったので、ついで」

「つい拉致するんですね斎藤さん」

おお姉ちゃんがツッコミをいれる前にぼやいておく。

「しかし、不測の事態に葵の注意は完璧に坊ちゃんにありました。私達と確認しなければ本気で噛み付いてきたでしょう」

「つまり？」

とじいさん。なんか頬が吊り上がっている。

「大好きな正太郎と手を繋いじゃってる。わ、私ドキドキしちゃうよお……………でも、命にかえても君を守るからね……………てな感じですよ」

「うまい！」

「すげえ、斎藤さんすげえ！ あお姉ちゃんの声そっくりだった！」
でも、そんな台詞をあお姉ちゃんが言うわけないし、なんか結構恐
い。

「斎藤はなんでも出来ますから」

調子に乗った斎藤さんは次は紗羅ちゃんの声でそう言った。

「つまり、葵を態勢拉致しなくても正太郎は大丈夫だったんじゃない
いか？」

「ええ、でも、この間も借りもありますから」

しれっと返す斎藤さん。本当に自由な人だ。

「勝手な事言わないでよ。誰が正太郎なんて……………後借りって貴
女の主人を罵倒した事！？ フォークで刺ってきてよく言うわよ」

「そんな事じゃありません」

ピシヤリと言い放つ斎藤さん。そんな事であるじいさんは畳にの
字を書いている。

「じゃあ、なんだっての！？」

あお姉ちゃんもなんだかヒートアップしてきている。

「言うまでもない！ 貴女がいなくなってた間、坊ちゃんの面倒を

見ている時この斎藤も『斎藤さんすごいねえ、なんでも出来るんだ。僕斎藤さん大好きだよ。結婚したい』と坊ちゃんにプロポーズを受けてるんです」

.....

とりあえずタイムマシン、なんでも良いから過去に行って俺を矯正しないと。

「後、坊ちゃん専任が何故私に回ってこないのですか！」

やめてくれ斎藤さん。じいさんが凹みきって死んじゃまう。

「べ、別に正太郎の事なんて好きにしたら良いじゃない。見込みあるかと思っただけど大してないし」

やめてくれ。俺も凹みきって死んじゃまう。

.....と、斎藤さんが舌を出して笑った。

笑った。

スツゴい冷たい笑顔。それに何故か悪戯っぽく舌を出している。

そして斎藤さんが指をパチン鳴らした。

じいさんの背中にある壁に白いカーテンみたいなものが下りてきた。あれは、プロジェクターとかに使うやつだよな。映像が映るやつ。

『えと、お仕えしたい人がいるっていうか、大好きな子がいるんです』

白幕に映し出されたのは………えーと、あお姉ちゃんだよな。しかも大分若い、でも今も若いから、幼いって感じか。

『まだまだ子供ですけど、絶対素敵な男性になります』

映像のあお姉ちゃんすっごく嬉しそうだな。あお姉ちゃんがここまで言う男って誰だろうか。恋人とかなんだろうか。そして、なんで俺の胸はこんな重いんだ。

「やめて！ 私が悪かったから！ もうやめ………」

限界を超えたあお姉ちゃんが斎藤さんに掴みかかった。斎藤さんはあお姉ちゃんの両手首を掴み、更に頬を吊り上げた。

続いて白幕に映し出されたのは………

「ノート？」

「彼女、葵は日記をつけるのが習慣らしくて、今日はその最新版を手に入れてきました」

と斎藤さんがただの大学ノートが映っている映像に補足をつけた。

あお姉ちゃんの背中を見ている俺は、あお姉ちゃんが呼吸すらしてないんじゃないかというくらい微動だにしてない事が………っ
て急激に震え出した。

「斎藤さん……………わかったわ。私が悪かった。だから」

『今日、遂にこの時がやってきた。日向正太郎、彼に会える。どんな素敵な人になってるだろう？ 声は大人になっただろうか？ 背は？ もう、考え出したらキリがなかった』

「いや……………斎藤さん！ 斎藤さムグツ！」

始まったのは日記の朗読、声は完璧にあお姉ちゃんのだが、恐らく斎藤さんの仕業だ。そして、あお姉ちゃんは斎藤さんに羽交い締めに入れ口を押さえられた。瞬きをしたら、手首を掴んでいた斎藤さんがあお姉ちゃんを羽交い締めにしていたからビックリ……………してない、斎藤さんだもん。

『遂に会った。遠くから見ても一目でわかった。速く触れたい、声を聞きたい、私を見てほしい。そんな気持ちで近づいた。シヨックだったのは私を忘れていた事、それだけ。正太郎は想像よりもずっと素敵な男性になっていた。まだちよつぴり子供だけとお姉さんがいればきつと大丈夫だよ。憎まれ口も厭味も、本当は辛いけど、全部正太郎のため。明日も貴方に会えるって事がこんな幸せだと思わなかった。明日もきつと私は笑顔でいられる。ドキドキして寝られないかも……………はーと』

「キヤー！ キヤーッ！ ウワアアアッ！」

限界を迎えたらしいあお姉ちゃんが壊れた。騒ぐだけしか出来ないというのは、斎藤さんの押さえ込みは相当なものなのだろう。

「反省しましたか？ 坊ちゃんの専任と旦那様の専任を交換してくれますか？」

すっげえ楽しそうだよ斎藤さん。

「いやああ！ あんなじいさんいやあああつ！」

二人ともやめたげて、じいさんが、じいさんが！

「全く……………少しは素直にやったらどうですか？ 坊ちゃんは確かにまだ子供ですが、いずれは」

「そんなのわかってる！ 正太郎は素敵な男性になるもん、でも、私がこうやって厳しくしなきゃ……………私も、甘えたいし、甘やかしたいけどダメなの！」

ようやく解放されたあお姉ちゃんは、斎藤さんにつかみ掛かる。

「飴と鞭、ですよ」

斎藤さんが快活に笑った。キャラじゃないくらい清々しく、そして気味が悪いくらい笑った。

結局あお姉ちゃんは背中しか見えないから表情は窺い知れない。想像も、あんまり出来そうにない。

「部屋の隅で泣いているジジイも最初は酷いものだったらしいですよ。私の母さんによれば」

と斎藤さん。つまり、斎藤さんのお母さんは斎藤さんの先任にだったわけか。

とつかいいい加減にしてください。部屋の隅にいたじいさんが、俺の袖で涙を拭ってるんだよ。すっげえウザいし、このワイシャツは後で新しいのにかえてもらおう斎藤さんに。

「あー、すんませーん……………葵ちゃん？」

駄目だ。もう完璧に反応してくんない。

あの後車で家まで送ってもらって、あお姉ちゃんは真っ直ぐ部屋の中に向かって、そのまま鍵を閉めて出て来なくなってしまった。

この家に来て住むことになったばかりのあお姉ちゃんに部屋がある筈もない。今、あお姉ちゃんが引きこもってる部屋は紗羅ちゃんの部屋だが。

とりあえず拉致があかないので、俺は一階に降りた。今更かもしれないが、この家は二階建て一軒家、俺の部屋と紗羅ちゃんの部屋は二階、後二つ部屋があるが、使ってない物置と化している。父さんがいた頃から住んでる家、元から三人で住むにも大きな家だったから部屋は余っている。片してあお姉ちゃんの部屋を用意してあげなきゃな。

「ただいま帰りました」

「紗羅ちゃん。そういや」

「ごめんなさい！ 私、またしょう君や愛さんに迷惑かけちゃいました……………でも、私は同情とかでしょう君に好きになってもらうわけじゃありません。私の力、魅力で貴方をメロメロにします」

……………驚いた。素直に驚いた。

玄関を通り掛かったら紗羅ちゃんが帰ってきたところに出くわしただけだったが、今の宣言をした紗羅ちゃんはとても……………綺麗だった。格好よかった。

「あはは、お手柔らかに頼むよ」

なんて返したらいいか分からない俺は、よく考えないで答えていた。

「はい、じっくりじわじわ追い詰めちゃいます」

目を少し細めて笑う紗羅ちゃん、なんだか眼光が猛禽類を思い出させた。

「さて、今日は奥様は帰れないそうですからね。凹みきって部屋から出て来ないジジイから解放された斎藤が晩御飯を……………いえ、デザートを……………お嬢さん、最近やるようになりましたね」

斎藤さん登場の理由は斎藤さんが全部言ってくれたので、聞き直す必要もない。斎藤さんが現れて早々凹んでるのは、紗羅ちゃんが夕食からデザートまで用意してるからだっただけ。もちろん、俺も手伝っている。包丁と火を使わない事は俺の出番だけ……………あれ？調理には一切いらぬ人じゃね？俺の存在皿運びじゃね？

「斎藤さんは、二階でいじけてるメイドを呼び出してきてください。聞けば斎藤さんが原因だそうじゃないですか、本当は、本気で、心底、斎藤さんが来なければ、しょう君と二人きりが完成してご飯を食べさせあいつこんな夢のような時間が出来たんですけどね。斎藤さんが来てしまったんで、呼んでみてください。別に、呼び出すのに私達が食事を終了してしまうくらい時間が掛かってもいいですよ？」

こんな長い言葉をよく噛みもせずと言えるな紗羅ちゃんは。そして、あお姉ちゃんに対してだとすんごく厳しいな。やっべ、共同生活に早速暗雲が。

「ふむ、この斎藤、坊ちゃんがご飯を食べる顔がお気に入りです。無邪気無垢な感じが好きです。だから、それには従えませんが」

となんだか今日は攻撃的な斎藤さん。

「それは同意せざるおえませんね。なら、食事を始めましょうか」

と紗羅ちゃん。

「って！ なに紗羅ちゃんはあお姉ちゃん無視しようとしてるんだよ！？」

「あう、ばれました……………」

「冗談でも、あんましょくないよそういうの。俺は嫌いだな」

そう言って俺は二階を目指す。

階段を上がる。そこで気付いた。部屋が開いている。ドアが開きっぱなしになっている。慌てて俺は中を確認するが、そこにあお姉ちゃんはいない。態態隠れる真似もしないだろうから、外に行ったのか。

「しょう君！ しょう君！ しょう君しょう君しょう君……………」
「ごめんなさい、私、ごめんなさい……………」

部屋の中に気を取られて、俺は部屋の中に倒れ込むように紗羅ちゃんに押し倒された。

正面から倒れたので手はつけたし、受け身つぱい事も出来たが、紗羅ちゃんが背中にしがみついて動けなかった。

「私、私……………もう言いません。冗談も、嘘も、しょう君嫌がる事も……………だから！」

「紗羅ちゃん！」

無理矢理起き上がる。背中にしがみついていた紗羅ちゃんは当然振りほどかれて床に倒れた。俺はその肩を掴んで泣いてる紗羅ちゃんを見据える。

「仲良くしようよ。俺も君も、母さんにおお姉ちゃん、じいさんに斎藤さん、皆家族で、皆味方だろ？ あお姉ちゃん、きっと君に拒絶されるの気にしてたんだよ」

「……………優……………い……………方は……………で……………」

なにかを呟く紗羅ちゃん、こんな距離なのに全く聞こえない。

「昔言われたんです……………昨日も、私の事も好きだって葵さんに……………でも、本当に私なんかを」

「なんかじゃない……………なんかじゃ」

その時、俺と紗羅ちゃんの横にノートが落ちてきた。

「その開いてるページ読んであげてください。斎藤が出来るのは、それと外で車の手配だけです」

紗羅ちゃんと顔を再度見合わせ、明かりをつけてそれを読む。ああ姉ちゃんの日記であることはすぐに分かった。

『斎藤さんから紗羅の事を聞かされた時はショックだった。今まで知らずに過ごしてきた自分に腹が立った。今すぐ行って抱きしめてあげたい。今すぐ行って一緒に泣いてあげたい。でも、それすらも出来ないくらい紗羅は不安定らしい。少しだけ様子を映したビデオ

を見せて貰ったが、見てられなかった。痩せて、目も虚ろで、可哀相、なんて酷い事を、私は許せない。中城も日向も、皆許せない。あの二人は、二人だけは私が守ってあげなきゃ、力をつけて、私が絶対に」

見開きの左側は読み終わった。そして右。

「紗羅は回復にあるらしい、良かった。正太郎に会いたがっている紗羅、正太郎を好きでいる紗羅、お姉ちゃんとして二人の恋を応援したい。紗羅と正太郎が二人で歩いている未来にお姉ちゃんもいれたらな」

「それは斎藤が用意したコピーノートです。坊ちゃん達に見せるペー지를用意したから時間軸バラバラですが、葵への脅しにはなるでしょう。それは坊ちゃんに差し上げます」

あまりに楽しそうな冷たい笑顔の斎藤さんだった。

「……………謝りたい。しょう君私謝りたいです!」

よし!決まったな。

斎藤さんの車で来たのはまた馬鹿でかい敷地。じいさんの屋敷以上に敷地はデカイが、中はいくつも建物が立ってる。巨大な門を越えた先の此処は？

「メイド養成所ってどこですかね。ここで日向の血筋に仕える人間を用意する場です。私も此処出身ですよ」

そして車は一つの施設の前に停まる。

「どうぞ。ここが寮です。きっとここに戻ってるでしょう。そして、荷物纏めて……………どうなるやら、ここには戻れないでしょうし」

ドアを開けてもらって俺は車外に出る。

「戻れないんですか？」

「ええ、どんな内容でも理由でも、ここに戻るって事は御主人様の要望に対応出来なかった出来損ないですから。処分されるんです」

……………なんだよ、それ。なんか腹立つ。

「さて、坊ちゃん。斎藤はここから中立です、そして、出来損ないを自ら回収させるのはメイドとして推奨しません。ですから、進めば敵、帰れば味方です斎藤は」

嫌だ。もう嫌だ。腹立つ。許さない。この仕組みも、今の状況も、腹立つ。

「斎藤さん。俺は斎藤さん好きです。家族だと思ってます。だから、

斎藤さんが敵になるなんて事は有り得ない」

「しょう君、カッコイイです……………」

俺は進む。あお姉ちゃんにもつかい会って話をしなきゃ。なんで家から急に出てっちゃったのか。

「……………え？」

なんで俺は急にこんな状況に？

「ここは聖域です。日向の名を持っていても簡単には入ることを許してません」

俺はドア開けた瞬間に誰かに左腕を捻りあげられて、首にナイフを当てられている。

ドア開けた時に見えたのはメイド服だけ、後は何が起こったか、速過ぎてなにがなんだか。ナイフは態と見せられたし。

「あの、あお姉ちゃ　　葵は戻ってますか？」

「ああ、あの出来損ないの主でしたか。アレなら荷物整理してま
よ泣きながらね」

「っ!?! どこですか? 会わせて下さい!」

泣いている? またかよ! また泣かせてるのか、また何も俺は気づか
ずに。

「だから、聞いてますか? 貴方はここには入れないんです。ああ、
血筋を考えたら余計に入れませんか」

.....

「いい加減にしろ! 俺は家族に、姉ちゃんに、会うだけだ! さ
つきから出来損ないだの血筋だの、頭悪い事言いやがって!」

アドレナリンか、血が煮え繰り返ってるからか痛みなんか感じない。
首につけられたナイフを握る。ジンジンするだけで痛みなんか。

振り向く、肩がおかしな感じがするが振りかえってやる。

「やめなさい! 腕がどうなっても!」

「なんだよ。俺は、家族に泣いて欲しくねえんだよ! 後な! 二
度と俺の家族を出来損ないなんて言うな! 次は許さない!」

振り返った先には眼鏡美人さん。なんか声よりずっと可愛くて驚い
た。それにぎりぎり腕を放してくれたし。

「は、はい！ 申し訳ありません……………」

「ふふふ、鈴蘭ともあろうう人がまさか坊ちゃんに屈服させられるとは」

と斎藤さんが笑う。紗羅ちゃんもしっかり斎藤さんに押さえられる。

「くっ、斎藤。私は、ただ……………」

「あ、えっと、鈴蘭さん？ あお姉ちゃんは？」

「え？ えっと葵なら……………そこに」

指差された先を振り返れば、あお姉ちゃんが立っていた。やっぱり泣いているし、後寝る時に必ずないと寝れないと昔言っていた大きなウサギのぬいぐるみ、名前はチャッピーを抱えている。

「なんで来たのよ……………私はただこの子を取りに来ただけなのに……………情けない姿、あんまり見せたくなかったのに……………」

……………え？

やべ、急に手が痛くなってきた。

「えっと……………家から出て行ったんじゃない？」

「なんでよ。私、まだ貴方を立派な男性にしてない」

「えっと……………俺が勝手に熱くなってただけ？」

「ええ、だから斎藤は帰るように言ったのに。面白かったからいいですけどね」

……………俺は泣いた。

「その、失礼な言動に手の傷や腕、本当に申し訳ありません！」

と鈴蘭さんに頭を下げられた。

「いや、良いんです。俺の勘違いだし、それだけ鈴蘭さんが本気で此処を守ってるって事でしょ？」

聞けば、鈴蘭さんはメイド養成所のメイド長らしい。ここのメイドさん達を一番大事にしてるそうだ。

「はい、そう言って頂けると。正太郎様、これは私の番号です。困った時にお使い下さい。鈴蘭が力を貸しますから」

と可愛いメモ用紙を頂いた。

「ありがとうございます。手当も、本当に迷惑かけました」

頭を下げて俺は車に向かう。鈴蘭さんはいつまでも笑顔で手を振っていた。

「応援するけど、紗羅、貴方も素敵な女性するんですからね。覚悟しなさい」

すっかりお姉さんを取り戻したあお姉ちゃん。紗羅ちゃんと二人で俺はそんなあお姉ちゃんを優しい目で見ている。

「な、なによ。ビシバシいくんだから覚悟しなさいよ。後、大好きよ二人とも」

これがあお姉ちゃんの飴と鞭らしい。なんか笑える。

家族。うん、やっぱりこれが今の俺達の間係を表すのにピッタリな言葉だ。

四話

「バイトだ。決まったぞゴミクス」

これが発端。発端って言葉を『ほったん』とは読めなかった人は素直に挙手してほしい。俺と握手しよう。

「馬鹿野郎、低脳、バイトだ」

「愛、なんで罵りながらなんだ？」

「ボクもあまり趣味じゃないんだがね。罵られるお仕事だから反応を見てるんだ」

「……………ちょっとタイム」

なんだ？罵られるとお金もらえる仕事って？

普通に上司や先輩に罵られたり馬鹿にされたり、辛い事は仕事なんだからあるだろうが、この罵倒のされかたはある種小学生並だろ。一体どんなバイトだって

「速くしなさいよド低脳」

やっべ、その通りだったよ愛しゃん。『ド』ついたよ『ド』が。たしかに俺、日向正太郎は馬鹿さ、低脳さ。しかしながら

「なに？ 低脳に見られたら私にも馬鹿が移っちゃうわ」

……………この黒髪の清楚系のお嬢さんがこんな言葉遣いだときギャップが凄いな。泣きそうだけど。

「すみません。ですが」

「は！？ 私に、私にお前ごときが『ですが』なんて言葉を許されると思つて？」

最近美人さんに会う機会が多いなあ。とか思ってた三時間前の俺に理由を説明して家に帰らせたい。

そして記憶にあるしこのお嬢さん。

お嬢さんと言うくらいにはこの方はお嬢さんだ。親がなにやって金持ちなのかは知らんが、愛がつてで持ってきたバイトは……………言わば執事、それ以下の小間使いだ。この黒髪清楚綺麗系なお嬢さんの。この馬鹿でかい家の一室、この馬鹿でかい部屋で俺は掃除しながらお嬢さんの相手だ。

和服似合いそうだなこのお嬢さん。やっぱ寝巻は……………パジャマ、うん、着物で寝たら似合いそうだけど、やっぱギャップ狙ってパジャマだ。色は明るい感じで

「ちよつと聞いてんの!？」

「はい!」

「喉渴いた。お水、貰つてきて」

「了解であります! それでどこへいけばいいのでしょうか?」

この学校の体育館のような広さを持つこの屋敷で、水一つ探すにも時間が掛かりそうだし、なにしろ今日来たばかりだぞ俺は。

「なに? この私にそんな手間取らす気? 正太郎の癖に生意気言わないで……………つて」

「やっぱ俺の事覚えてたな。愛の知り合いってお前だろ。普通、今日来たばかりの男に大事なお嬢さんの面倒なんて見させないだろうからな」

「くつ、正太郎は私の言うこと聞いてればいいの! お、お金に困つてんでしょ!?! 私がそれを助けてあげるんだから、言うこと聞いてればいいの!」

やっぱ人は簡単には変わらないんだな。

真宮沙織まみやのり父さんが生きてた頃、じいさんが開く集まりとは別に、父さんが行っていた仕事の集まりで会った女の子だ。やっぱり歳も近い事もあり、父さん達が仕事の話パーティーしながら話してる間は、俺はこの子達と遊んでいた。

やっぱりもやっぱり、大人は子供達を集めとけばなんとかなると思
ってたんだろが、この子だけは違う。昔から偉そうで、実際偉い
のかもしないけど、俺の事を目の敵にしてよくケンカした記憶が
ある。

「態態な事して、そこまで俺を虐めたいかよ？」

きつとそうだ。愛とどう知り合ったのかは知らないけど、俺がバイ
ト探してるって言ってたのを聞いて思いついたんだろ。全く持っ
て酷い奴だ。

「ちがつ　　そうよ。体だって無駄に大きくなったんだから、も
っと厳しいお願いしたって壊れないでしょ？」

女王様気取りかよ。それっぽい笑み浮かべやがって、愛には悪いけ
ど、こんな体も気持ちも擦り減って駄目になりそうなバイトは……

……

『本当にヘタレ。お母さんに悪いと思わないの？』

ああ姉ちゃん言葉が……

「てりゃ」

ポカ。

擬音にするとこんな感じ、実際にこれくらい可愛い音が沙織の頭か
ら鳴った。

綺麗な手で沙織に手刀を振り下ろした人物が座っている沙織の背後

から現れた。

「じゃじゃーん」

と言いながら。

「もう、ダメだよ。沙織ちゃんが一番楽しみにしてたじゃない！
しようちゃんに会える、って。枕抱いて足をバタバタさせちゃうく
らい」

「ちよっ！　なんで言うつのお姉ちゃん！」

お姉ちゃん、とは呼ばれたが、彼女は沙織と似た顔をしながら笑っ
ている。似ている、どころではなくほとんど同じ顔を持った彼女は
真宮華織まみやかおし沙織の双子の姉だ。

「華織、久々だな」

「そっだね。三ヶ月は長いね」

「え！？　ちよっと待ってよ」

沙織が動揺しながら割り込んできた。今の会話のどこに驚くところ
があつたんだ？

「私、ずっと会ってなかったよ？　なんでお姉ちゃんは会ってるの
！？」

「しようちゃんのお父様のお葬式の日、私達が海外に住む事をし
ようちゃんに言ったじゃない？」

「うん、そうだった」

「あの時、私はしょうちゃんに手紙書くって言って」

そう、父さんの葬式の日。更に別れをしなきゃいけないくて、涙腺弱まってた俺はボロボロ泣いたっけ。

「それで、手紙をメールにかえてやり取りを続けて、私達の高校入学にあわせて帰国した次の日に我慢しきれなくなって会いに行ったの。それで、ちよくちよく会ってるのさ」

「な、な、なんでよ!」

本当になんでよ、だよ。どうして華織と会ってて沙織が怒るんだ。

「沙織ちゃんが素直にならないのがいけないよ。それに私達の方が忙しくてあまり会えてなかったし。沙織ちゃんに言ったって素直に会えた？ 今日だって最初に再開の挨拶も出来ないで意地悪してたのに」

「うっ……」

なんで二人が険悪なムードなんだ。もう少し仲良しな双子だったろ。

「しょうちゃん! アルバイトで来たんだよね?」

と華織。見分け方は簡単、眼鏡をしている方が華織、してないのが沙織だ。低脳な俺でも分かる間違い探した。

「ああ。しかし、沙織の相手は」

「この首輪を私と沙織ちゃんにつけて！」

はい？なに言ってるんだこの人間は？

笑顔、爽やかに可愛く、無駄なく、そんな言葉を堂々となんて言えた？つか言ったのか？勘違い、聞き間違いの可能性があるだろ？この渡された首輪も実は違うもので、首輪なんかじゃなくて、ほら時計とか、バンドしかない新作の時計とか……………

「ってなんでだよ！？」

「速く！ もう、もう我慢できないのお……………」

ヤバイ、何がヤバいって全部ヤバイよ。こんな美人さんに詰め寄られて、両手は俺の胸に触れていて潤んだ瞳で見つめられてる。のに、なのに全くときめきはない。このドキドキはこの状況をどうしたらいいのかと、首輪したらその後どうなるかという興味、となんで沙織は何も言わないのだろうか。色々渦巻いてよくわからなくなっている俺。

「なんで？ この後はお風呂入って背中を流してあげるだけだよ？ マッサージもしようか？」

上気した顔、俺を見つめるその顔がどこまでも艶っぽくて、瞳が綺麗で……………

「きゃん。これで華織は、身も心もしょうちゃんの、モ・ノ」

「……っ……っ……っ！」

「てうあ？ なに奇行と奇声のコンビをやつてやがるの？ キモいよアンタ。私のお姉ちゃんになしてくれんよ」

冷たい一言。あまりにもその通り過ぎて言い返せず泣きそつ。

でも、少し冷静に

「沙織ちゃんいいでしょ？ 沙織ちゃんもはい、これ、つけてもらいなよ」

「はあ！？ なんでよ！ そんな気持ち悪い事……………」

「本当に？」

「な、なんでよ？ だって気持ち悪いじゃない」

「気持ち悪い？」

「……………あ、え……………その……………」

えーと、えと、なんで少しづつ自信なくしてきてんの沙織さん。いや、華織さんもすつげえ楽しそうだし。

「素直になりなよ。またのけ者にしちゃうよ？」

「……………う……………」

「嫌われたいの？ しょうちゃんに」

あれ？沙織のきつめの目付きがどんどん弱くなって、泣きそうな顔になってきたぞ。まさかな。この怪しい雰囲気まさかな。

座っていた沙織さんが何故か立ち上がって、何故か俺の前に立った。何故か何かを決意するかのように唇を噛み締めている。手にはさつき気付いたら華織につけていた首輪を何故か沙織も持っている。どうやら受け取ってしまったらしい。

「しよ、しよしよし……………正太郎！」

裏返った。噛みまくった挙げ句裏返った。

この後の展開は有り得ない。有るわけない。あっちゃいけない。

「首輪、首輪して、私の首に、首輪……………してほしいの！」

……………えと、沙織さんだよ
ね？ちよつとぼーつとしてる間に沙織と華織が入れ替わった。なんてことないかな？

ないかなって自分で言っている以上分かっているんだ。まず服装が違うし、首輪の有無もあるし、分かっている。この潤んだ目で見上げてきて、控え目の胸の上で祈るように手を合わせてる仕種をしている美少女が俺に何を言った？

強気な沙織がこんな弱々しいと侮げで、とても、とてつもなく可愛い。

「お願い、して……………」

いや、ダメだ。やっちゃダメだ。ダメだ。紗羅ちゃんに怒られ……

……

「……………ありがと。で、いいのかな？ えへへ」

……………この日、日向正太郎は御主人様になった。

って待てい！なにフェードアウトしようとしてんだよこんちくしよ
う！

これじゃ俺ただの変態じゃないか。幼なじみのような双子の女の子に首輪をして、ベッドの上に寝ている俺をどうやって変態じゃないと言ひ張ればいい誰か教えてくれ。

「えへへ、気持ちいい？」

「かたい……………」

言つよ！誤解とか受けないように言つよ！

なんか気付いたらベッドの上でマッサージ受けてんだよ俺は！？何故かな、何故かマッサージ受けてんだよ。

二回マッサージと繰り返すくらいビクビクしてます俺日向正太郎。

「御主人様あ……………そろそろ御褒美ください」

「……………」

肩を回しながら俺は半身を起こしてベッドの上に座る。

どうしょ。この期待に満ちた四つの瞳を俺はどうすれば

「「「きゃふん「「

とりあえず撫でてみた。ベッドの上に座る俺、ベッドから下りてひざまずいて頭を差し出してきている双子姉妹（首輪装着）

いちいちゼロと電話に打ち込まれたらもう俺に勝ち目はない構図だろう。さて、どうしてこんな事になってしまったのだろうか。どうして、こんな抜け出せない状況が出来上がったのだろうか。

『しょう君楽しそうだなあ……………』

……………っ！？

右を見る、左を見る、後ろを見る、上を見る。

「しょうちゃん？ どうしたの？」

「拳動不審ね。確かにこんな変態行為見られたらアレだけど、誰も見ないわよ。この部屋は私達の自室だし」

「えへへ、沙織ちゃん。その変態行為嬉しいし好きでしょ?」

その問いに首肯する沙織。

「それと正太郎、右手、怪我してる」

「今更気付いたのか?」

「べ、別に……………いや、うん、そう、あまりにもどうでもよくて今気付いたわ」

流石に手の平に浅くなく一文字についた傷だ。一日二日じゃ治るわけないし、包帯も外せなかったが、痛みはあんまりないし、さっき掃除してる時も別に気になる程の痛みはなかった。

「名誉の負傷、だよな?」

「ああ。勘違いだけど名誉の……………」

「華織? なんで知ってた?」

「知らないよ。男の子が包帯巻く程の怪我は誇らしいものでしょ? きつと」

ああ、そういうもんかな。そういう、もんかな?

『あつ……………あつ……………』

まただ!今度は間違いない。

周囲をキョロキョロと見回す。

「本当どうしたの正太郎。誰も……………」

「いらっしゃい」

驚く俺と沙織、華織は不敵な笑みで部屋の入口を見ている。冷たい表情で立っているのは　もう言うまでもなく我等がプリンセス紗羅ちゃんだ。

「こんにちは。私の旦那様を返してもらいに来ました」

え？なにこの展開？どゆこと？

つか、絶対俺怒られる気がする。そしてなにか違和感が。

「えへへ、それは出来ないな。私達の御主人様だもん。ほら首輪も」

「パジャマ以外にしよう君にはアブノーマルな趣味はないですよ」

パジャマはアブノーマルじゃない！正しい欲求の在り方だ。

とか言う前に、今日の紗羅ちゃんはとても輝いて、強く見える。これが違和感の正体だ。綺麗な外見の紗羅ちゃんが気丈に振る舞うと格好いい、非常に格好いい。

「はいはい。紗羅、これどうする？」

いつの間にか部屋に入り込んでいた葵さん、言い直すとあお姉ちゃ

ん。紗羅ちゃんが開けた扉から入って来たのだろう。気配を殺して。

そして、あお姉ちゃんが手に持っているのは、花瓶？

「はい、外に捨てるか、ベランダに置いておいてほしいです。しっかり窓は開けて、お願いします」

いや、本当今日の紗羅ちゃん格好いい。

「チツ……………流石ですね。中城さん。奴隷お嬢様は人を揺らがせる物をよくわかってらっしゃるのかしら？」

「……………何を言ったって、こんな卑怯な手で男性をモノにしようとする女性には負けません」

「紗羅、今のは点数高いわよ」

あお姉ちゃんが紗羅ちゃんの傍らに寄った。

さて、一体なんの話をしてるんだ。顔を見る限りでは沙織も置いてきぼりっぽいし。

でも、

「華織」

「しょうちゃ

」

「俺、女の子叩いたの初めてだ」

「な、なんで!? 私は、なにも」

今の発言は許せない。凄く腹が立った。

「今の紗羅ちゃんの事を言ったんだろ? だからだ。違うんなら誰に言ったのか言えよ」

華織は頬を押さえて目を丸くして見上げてくる。

「な、な、しょうちゃんが……………」

泣き出した。自分のせいで女の子が泣くのは……………流石に叩くのはやりすぎか……………謝るべきか……………

「なに格好いい事言って行動したのに自信なくしとるか」

「いて! あお姉ちゃん、そういう場合優しく攻撃しない? なんか筋かなんか入って凄く腕痛いんだけど今のパンチ」

「さっきの花瓶、ちよっとしたアロマよ」

あ、無視っすか、そうっすか。

アロマ? アロマテラピーとかいうやつ? 煙……………じゃなくてお香焚いたりするやつか、アロマテラピーはもっと広い意味らしいけどそれと花瓶がなんの関係が?

「しょう君、この部屋にどれくらい居ました?」

「え？」

五時間くらいじゃないのかな。時計だって……………

「八時間……………なんでだ。時間の感覚が」

その時高笑いが聞こえてきた。声の先は言うまでもなく。

「全く。酷いなあ。今日でしようちゃんを私達のモノにしようとしたのに……………全く、全く、邪魔してさ」

「お姉ちゃん……………」

目付きが違う。前までの華織はあんなに怖い目はしてなかった。したことなかったぞ。

「本当は高校卒業して、結婚、って流れを用意してたんだけど、中城さんのせいで予定を早めなきゃいけなくなっちゃって、ちよっと無理し過ぎたかな……………あゝ、邪魔だなゝ私のほうが絶対しようちゃん幸せなのに」

「そんなことありません！　こんな薬でしよう君を惑わすような真似、許せません。貴方じゃしよう君を幸せに出来ません！」

薬？時間の感覚、花瓶、アロマ、首輪？俺がぼーっとしてた理由。

そついうことなのか。まさか、本当に。

「お姉ちゃん、薬ってなに？」

「沙織ちゃんが素直になるお薬、しようちゃんが私達にめろめろになっちゃんお薬、この二つは近い物よ。素直になるだけなんだから」

「お姉ちゃん……………」

「あゝ、帰ってくれるかな？ 私、今日はもう疲れた。私の負けだから」

「しようちゃんも連れてきます」

「今日は帰すから、次は覚悟してね。しようちゃん」

あんまり動かない頭で記憶してたのは妖艶なまでに美しい華織の笑顔と沙織の不安げな顔だった。

「あう、あう」

元に戻りました。

「あう、怖かったです。ちょっと頑張り過ぎました」

「えと、大丈夫？ それと、ありがとう？ かな」

ゴスッ。

っっておかしくね？なんで？なんで人体からそんな擬音が聞こえてくるの？

「あお姉ちゃん痛い……………」

もちろんこの擬音は俺の体から発生した物だ。

「ばか、なんであんな変態行為してるかな」

「いや、そのごめんなさい」

「うっ、素直に謝られると……………でも、いくらアロマのせいだからってあんな変態で異常な行為を強要されても、精神力でなんとかなるでしょ!？」

確かに。まだ首輪のくだりでは頭は働いてたわけだし、流石にあそこまでの異常行動なら正常な意識を保てそうなのに。

「つまり……………しょう君は少し興味があるんですね。首輪」

……………

「ちょっと！今の間はなに？なんで間があくのよ」

「い、いや、紗羅ちゃんあお姉ちゃん、助けてくれてありがとう！
じゃあ先に帰って夕飯の支度でもしようかな！」

全力逃亡を俺は敢行した。

苛々する。まさかここまで予定通りいかないなんて。

理由はどうであれ私達が一番日向正太郎を愛しているのに。ずっと好きで、素直になれない妹も幸せになれる計画が用意されていたのに、一人のイレギュラーで台なし。

高校生の間は三人で、時に二人で、恋人としての時間を過ごす。そして、大学生で学生結婚。親の援助は仕方なしに、同棲を初め、三人でい続ける。夫婦の名義は悪いけど私、でも沙織ちゃんには寂しいなんて感情を抱けないくらい彼との時間を設ける。あくまでも三人で。昔からの約束なんだから。

全部予定があつたのに、計画してたのに、なにもかも上手くいかなかった。確かに強行手段に踏み切った。少し強引さはあつたが、まさか私が、正太郎に打たれるなんて……………

頬に触れる。流石に女の子相手だ。彼も随分加減してくれた。痛みもなく赤くもなっていない。

まあ、半日も経てば当然か。

しかし、確かにそこに打たれた感触はある。胸には痛みもある。

でもなぜだろう。何故、洗面台の鏡に映る私は笑ってるのだろうか？

「簡単ね。今日はこれ以上やって嫌われなくなかったから、次はないわ。しょうちゃん」

そうだ。約束であり、私の人生である正太郎を渡すわけにはいかない。私だけじゃないんだ泣くのは、この鏡に映った姿と同じ姿を持った妹も泣くんだ。それは駄目だ。だから笑う。

私は、妹は、この顔は、笑う。

五話

運動神経普通。

なにを持って普通とするか、なんて言うまでもなく。得意じゃないし、苦手でもない、だから中間の普通。

しかし！

「だらつしゃああああ！」

快音が響く。俺が素振りしてる横で、隣の田口君のバットから。あつ、今気合い入れて叫んだの俺です。そして素振りしてるが、球は飛んできてます、俺が打てないから素振りになっただけです。泣きたくなってきた。まだ手の傷が痛いからって事にしようか。

「しょうくん！ ファイトですよ！」

「しょうちゃん！ 頑張ってる！」

「……………が、頑張ったらいいんじゃない……………せいぜい」

泣きたくなくなってきた。つか、もう涙で視界がぼやけてきた。

「正太郎、なんだお前、モテ期か？」

と愛さん、愛と書いてめぐみさん。

「知らない。つか、なんで周りの皆そんなにぎらついた目で俺を睨んでんの!？」

いや、男子諸君、振り上げたバットと今にもこっちに飛んできそうなボールを下げて。

「そりゃ、双子の美少女転校生も転校初日からお前の婚約者、とか発言されたらな。『鬼畜日向。美少女達はお前に集まるのか!?!』」

『畜生日向。美少女達のどんな弱みを握っているのか!?!』
『天使紗羅ちゃんの胸は一体なにが詰まっているのか!?!』 この三つが次回の新聞部の見出しだそうだ」

三つ目は少し気になる。紗羅ちゃん最近風呂上がりネグリエで居間にいるようになったからな。確実に俺に意識させようとしてる。実際ネグリエ姿でチラチラこちらを見てくるし。流石に俺は居た堪れなくなつて部屋に逃げるのだが。

いや、無理だよ。あんな官能的な姿で居られたら俺の精神がオーバーヒートしちゃうつて。あのなにが詰まってるか皆気になってる膨らみなんて直視しただけで……………」

「おい正太郎。なに鼻の下伸ばして昨日の紗羅のネグリエ姿を回想している」

「……………そこまで分かる?」

「ああ。後、下手な事は言わん方がいいぞ。バット達がお前の頭というボールをホームランしたがってる」

いや、クラスメイト男子諸君落ち着いて。俺だってどうしてこうなつたか分からないんだから。

むしろ、さっきの言葉を返すと弱み握られてんの俺だからね。

転校生の美少女双子。言うまでもなくあの二人、真宮姉妹だ。

可愛い双子の登場に歓喜するクラスメイト男子達、その歓喜は次の瞬間打ち砕かれた。

「私達、二人とも日向君が大好きです。あつ、ちなみに妹の沙織ちゃんもツンデレなんで日向君にはきつくあたりますが、実際は寝る前に日向君の写真にキスして寝るくらいの純情娘です」

「ちょっと！ お姉ちゃん！」

「後婚約者でもありません」

静寂、そして

クラスメイト達からの問答、そして男子達からの実害。消しゴム消しカスをあそこまで投げなくてもいいじゃないか。

「日向の妻、と名乗って現れた転校生とはライバルです。皆さんよろしく願います！」

これが彼女達が現れた状況。

そして、今俺がバットやボールと戯れてるのは、ケンカとか男子達が暴力のために持ち出したとかじゃなくて、雨によって流れに流れた球技大会がなんと明日だからだ。午後の授業は練習にあてられている。

にしても、こんな暑いなかバット振るのもきついもんだな。それに、全く上達しないし俺。

「しょう君、お疲れ様です。あう、タオルとお茶です」

「ありがとう紗羅ちゃん。紗羅ちゃんは球技大会なにをするの？」
「ちなみに愛は野球。何故か男子しか出来ないのに野球。俺を弄るためなんじゃないかと思えてきた今日この頃。」

「あう、テニスです！」

「へえ、時間が合えば応援いくよ」

「あう、しょう君の応援があれば私は完璧です。私もしょう君の試

合は必ず応援しますから」

..... ちょっと気になった。

「自分の試合が被ってたらそっち参加しなきゃ駄目だよ」

「嫌です」

即答かよ。そうだろうと思ったよ。

ここはなんとかして説得せねば皆に迷惑が。

あっ、向こうからやってくるのは。

「しょうちゃんタオル」

「スポーツドリンク、はいらないみたいね」

紗織が俺の手を見て言う。そんな時紗羅ちゃんが俺と真宮姉妹の間に入り、撓わに実った胸を張って言う。

「しょう君には私というお嫁さんがいます。ですから」

「しょうちゃんのために用意したタオルだよ。使ってくれるよね？」

紗羅ちゃんを無視して横を通って俺に触れるまで寄ってくる華織、微かに笑ってる。なんか背筋がゾクツとする目でこちらを見上げながら笑ってる。

「ちょっと真宮さん。話を聞いて」

「えへ、聞いてないよ。しょうちゃんは私達のお嫁さんなんだから嫁かよ！一瞬エプロンしてお出迎えする俺が見えちまったよ。キモいわ。自分でも。」

「しよ、正太郎。まあ、アンタのために用意したから、さ。よければ飲んでよ。」

と紗羅ちゃんを避けて沙織がボトルを差し出してくる。

「あ、ああ、暑いし、飲めるかな貰うよ。」

「うん。あつ、せいぜいお腹壊さないようにね！」

やべ、沙織が可愛い。

まずい、素直な感想が出ちまった。心情を読み取られたのか紗羅ちゃんがつっげえジト目で睨んでくる。華織はそれを見て楽しそうに笑ってるし、じいさんはハンカチ噛みながら泣いてるし

「う……………うは……………？」

頭が酷く重い　　首に力が入らない。辺りも薄暗いし、腕が、動かないし、足も動かない？

「ってなんだこれ？」

小さな明かりを頼りに自分の動かない不自由な手を確認する。両腕にバンブルがついてる。こんな銀の洒落たバンブルをした覚えは全くない。このバンブルどこが洒落てるって二つのバンブルを鎖で繋いでる事かな。ほーら腕が離れな……………

「……………へ？」

足が気になった俺は重い首を上げて、半身起こして足を見してみる。

足にも同じ様に……………

日向正太郎は急速で脳を再起動させた。頭の上に小さな豆電球を確認。それが光源らしい。モルタルかなにか床は酷く冷たい。室内であることはこれで分かった。夏が近いのになんだか空気はひんやりしている。

そして……………え？手錠？これ手錠だよな？この私の自由を奪う物は手錠ってやつだよな？テレビか玩具の手錠しか見た事なかったし、すっげえな。重いんだな手錠ってあはは……………

玩具だと思いい込んで思い切り両手を広げようとするが、最近の玩具はよく出来ているらしい、本物の鉄のようにびくともしない。腕に食い込んで痛いだけだ。

凄いなあ玩具、もう少し体鍛えなきゃなあ。玩具も壊せないなんてあははは。

「起きましたか坊ちゃん」

この声、呼び方、間違いない。

俺は突然現れたこの俺を照らす豆電球より明るい光明に安堵しつつ、

「……………へ？ さ、いとつさん？」

「坊ちゃん、お仕置きです」

斎藤さんだ。間違いなく声も背格好も斎藤さん。

背格好という言い方をしたのは確実に斎藤さんではあるけれど、目を仮面舞踏会で女性がつけてるような蝶々みたいな形をした物で隠してるからだ。あれって隠してる事になるとは思えないけど。

そしてメイド服、そして手には鞭。

「斎藤さん、その手の鞭は何をする物品でしょう？」

「おかしな事を聞きますね坊ちゃん鞭は人を叩くものです。この場にいる人間を考えれば流石の坊ちゃんでも理解できるでしょう」

「え？ えー、僕馬鹿だからわかんない」

「ならその身に刻み込みましょう」

ダメだ。本気だ。これは本気だ。

「よお正太郎」

「じいさん！ アンタの差し金か！？ なんてこんな事に……………」

更に暗がりの奥からじいさん登場。しかし様子がおかしい、なんか沈んでるといつか、かなり悲しそうにしている。

「すまん正太郎。俺じゃどうにもならんかった」

え？なんでじいさんが謝るんだ？どうして？この馬鹿げた茶番を仕組んだのはじいさんだろ？

「おい息子」

ゾクツ、とした。生命の危機を本能が感じ取った。声が怒っている。

現れた母さんは……………

「母さん！ 待ってくれ！ その木刀はなに？ 母さん、母さん！」

「ぎゃあぎゃあ喚くな」

蹴られた。腹を思い切り蹴られた。なんでこんな厳しい仕打ちを受けなきゃならんのだ。

「待ってくれ。一体俺がなにを」

「馬鹿息子！」

木刀が振り下ろされた。半身起こして座っていた俺の真横の床が砕ける。

砕ける！？おかしいだろ！木刀だぞ、木刀よりこの床確実に硬いぞ！？

「息子、お前嫁というものがいながら、他の女にうつつを抜かすとは……………」

「ちよつと待ってくれ！誰の事だ！？俺はそんな女の子知らない」

母さんは木刀をモルタルだろう床に突き立てた。突き立てた。突き刺さった。木刀が、突き刺さっている。

あまりの恐怖に普通に漏らしそうになってしまった。

「次に下らない事を言ってみる。叩き割るぞ」

なにをですか！？あ、俺だよねやっぱり。

「……………しかし、好意を持たれる事はいいことだ。それに、紗羅ともしっかりとした婚約ではない。はつきりしろ！愚息！」

母さん、愚息って俺に対して言う言葉じゃないよね？他人にへりくだって言う言葉だよね？

「どづいう事だよ？俺は」

真後ろから轟音。恐る恐る振り返れば、壁が真っ直ぐ縦に裂けていた。

もう一度母さんを見れば、木刀を天に掲げるようにしている。つまり、刺さった木刀を抜きながら振り上げたら、壁を叩き割ったということだろうな……………え？

「晶子さん！？ ちょっと手加減しても……………」

「アンタは黙ってて！ これは私と息子の問題です！」

いや、だから、俺を置いてきぼりな感じなんとかしてよ。

そして俺が口を開く度にこの部屋が破壊されていくのなんとかして。発言権が全くないじゃないか俺の。

「いや、紗羅との婚約は正式なものでね、じいちゃんそれを守ってくれると……………いえ、正太郎の意見が大切です」

母さんの一睨みで小さくなるじいさん。俺と一緒に発言権ないな。

「……………」

なんか出才子の斎藤さんが暇だからか、鞭の素振りを始めた。

「お義母様待つて下さい！」

声が出た方を見ると、その場所にスポットライトが当たって紗羅ちゃんも真宮姉妹が姿を現す。

「どうして？ 私は正太郎にそんな半端な事をし続けることをしてほしくない」

どうやら紗羅ちゃんに対しては怒ってないらしい。そりゃそうか。

母さんは怒っているときは男っぽい口調になる癖がある。まあ、怒ってない時もたまに出る癖だが。

「まだしよう君の言葉をしっかりと聞いていません」

と紗羅ちゃん。何故か華織か眉をひそめた……………気がする。

「中城さんが言った事はその通りですが、しょうちゃんは今は誰にも恋愛感情がないと思います。まだそれを聞くのは、ちょっと早いのでは」

一つ気になった事がある。今だけ俺の発言権よ復活しろ。

「華織と沙織はなんでここにいるんだ？」

その瞬間世界が停止した。この冷たい感覚はどうやら真宮姉妹からきているらしい。

あれ？なんで華織と沙織は二人でこっち歩いてくるの？なんで顔がそんな引き攣ってるの？

華織が眼鏡を外す。丁寧にそれを仕舞って母さんとなにか話してる。沙織は斎藤さんのもとへ行き、話してる。

あれ？なんで母さんは木刀を華織に渡したの？そして、斎藤さんはなんで鞭を沙織に渡す？

「しょうちゃん、ちょっと調子に乗っちゃったかな？ ううん、怒ってないよ怒ってない。ちょっとしたスキンシップだよ」

華織さんの目が恐ろしい。笑ってない。顔は頬が引き攣って笑っているように見えるが目が笑ってない。

「えー、と華織さん？ 俺の話聞いて欲しいなあ」

「問答無用」

華織の姿が一瞬ブレた。そして華織はいつの間にか木刀を振り切っていた。

それと同時に再度背後から轟音。恐る恐る振り返れば、壁に十文字が出来上がっていた。

……………嘘でしょ？

「しょうちゃん。ちょっと、私と、うーん、楽しいことしょ？ えへへ」

俺は逃げ出した。

もちろん、芋虫のように無様に這って、這って、這いずって、出口なんてわからないが必死で這う。

「いたっ！ 痛い！ なんか背中がめっちゃ痛いっ！」

「そりゃね、哀れな芋虫にお仕置きをしてあげてるんだから、感謝しながら鳴きなさいよっ！」
沙織の声と風をきる音。

ああ……………寒い日に足に当たる縄跳びと同じくらいの痛さだと思ってた俺は今死んだよ。

予想以上にめっちゃ痛い。背中が駄目になるんじゃないかってくらい痛い。体操着じゃ駄目って事だけは文字通り痛いくらい理解した。

「つかなんで俺こんな痛い目合わなきゃなんないのさ!？」

「自分の胸に聞け馬鹿！ 鈍感！ 唐変木！」

流石双子だ。完璧なユニゾン。美しいね。斎藤さんめ、予備の鞭を華織に渡したな。

あれ？なんで俺はこんな客観的に……………

花畑、幻想的で、色とりどりの花は現実から掛け離れている。

そう、ここはきつと現実じゃない！夢の世界だ。ここでなら俺は全てを解放出来る。心も体も全てここは受け入れてくれる。

そう確信した俺は走り出す。絶叫する、とりあえず声を出して解放を喜ぶ。心地好くて、本当に気持ち良くて、嬉しくて。

いくら叫んでも喉に痛みはやってこない。叫ぶ事がこんなに楽しいなんて知らなかった。ストレスがみるみる消えていく。もう俺を止める物はなにもない。

あれ？誰かが、誰かが呼んでる。

初めては俺は目の前に川があることに気付いた。花畑の対岸は曇っていて暗い。花畑に暖かさを感じるなら向こう側は冷たさを感じる。

「おーいしよ〜たろ〜！」

じいさん！

その時俺は悟った。理解した。真に至った。真実を知った。

花畑の対岸、つまりじいさんに背を向けて駆け出す。

こういう時じいさんはよくない。なにがよくないって？とりあえずよくないんだ！

走る。

疾走する。

駆け抜ける。

俺の体がか風になった。いや、世界になった。俺という世界は駆け抜け

「ゴフッ！」

「あつ、起きた。大丈夫？　しょうちゃん痛くない？」

目の前に華織がいた。眼鏡をかけた双子の片割れ、華織だ。

「あれ？　俺なんかボコボコにされたような……………」

背中が結構ヒリヒリするが、とりあえず痛む後頭部を触る。

そこで華織の手が手刀の形を作っている事に気づく。

「……………ああ！　叩いたよ。しょうちゃん起きないんだもん。

斎藤？　って人の話だと背中は今後も残らないって、一日二日お風呂に入るのがきついただけだって。自業自得だよね！　しょうちゃんが私や沙織ちゃんの気持ちを考えてくれないんだから」

.....?

「なんだよ気持ちって？ 俺、さっきなんで打たれた？」

「なんでって.....決まってるじゃない！」

耳まで真っ赤にするかお、いや、

「沙織、眼鏡似合うな。流石は双子」

「え！？ なんで！？ なんで分かるのよ!？」

「ん？ ホク口、ほら」

俺はそう言っただけで頬を指す。『黒子』って読めないよね？ 『くろこ？』
なに言っただけでなるよね？ だからカタカナだよ。俺、少し賢そ
う？.....虚しくなってきたやめよ。

「.....そんなところまで見てたの？」

「そりゃな。小さい頃は華織、眼鏡してなかったろ？ だから見分
ける方法はいくつもあるよ」

小さい頃限定だが髪型だろ、後は耳の形、後、

「おい！ どうした沙織!？」

「ねえ、このまま聞かせて.....私の、私達の事好き？」

抱きしめられた、というか、胸に沙織が飛び込んできた。そこで俺は自分の状況が見えてきた。本当、動き悪い頭だ。

和室、恐らくじいさんの家、俺は布団で半身起こしてる。和室の癖に空調がきいてるのか部屋は涼しい。

よし、状況確認完了。

「そりゃあ……………幼なじみみたいなもんだからな。沙織は、俺の事嫌いじゃないのゴフツ」

「しょうちゃん？ 嫌いな人に抱き着くかな？ ……………てかさろそろいい加減しなさいよ？」

「はい！ すみません！」

今まで気配を殺していたらしい華織が、俺の後頭部に手刀を叩き込んで登場。『てか』の後はいつもの声色とは違って恐ろしかった。本気で。

「いや、だから、幼なじみとしては……………好きかな……………」

「……………」

華織は俺を見下ろしながら黙り、沙織は俺の胸に顔を埋めたまま反応がない。

そして間を置いて、二人は一斉に溜息を吐いた。沙織の溜息は俺の胸に当たってるので生暖かさを体操着越しに感じる。

「って俺まだ体操着じゃん……………着替えたいな」

「あーっ！ だから沙織ちゃん胸から動かないんだな！」

華織が突然騒ぐのでびっくり、眼鏡なしも似合うな華織。なんて言っ
つて見たり。

「……………」

「沙織、そろそろ離れないか？」

「私達が恋愛感情で好きって分かってくれたよね？」

そりゃもう痛いくらい。紗羅ちゃんの時と一緒だ。俺すごく鈍い
のか？そんな漫画の主人公みたいな特殊設定現実であるわけない。

「いや、鈍いよ。すごくくすんごく鈍い。ばかしょうちゃん」

……………沙織ってこんな可愛かったっけ？

とりあえず撫でてみる。

「むー」

とりあえず横で俺を睨んでる華織も撫でる。

「とりあえず、私と沙織ちゃんはこれで中城さんとは完璧にライブ
ルだよ。ガンガンしようちゃんを誘惑するからね」

と結構恐ろしい事を言う華織さん。

「私………もう少し素直になる。これ以上嫌われたくないし」と沙織。俺は別に嫌っちゃいない。嫌われてたとは思ってたが。

「うーん、なんかすまん。あんまし恋愛感情とか分かんなくて………でも、俺の好きは友人の好きだと思っ………多分」

「だから、私達がメロメロにしてあげる」

顔を上げた沙織、二人はユニゾンでそう言った。

「それで？ 良かったの紗羅」

と葵は問う。

「はい。あう、辛いことですから。好きって気持ちを気付いて貰えないのは。私もしよう君に妹扱いの時は辛かったですし、その、一緒に住んでる分のハンデです」

と紗羅は答えた。それに対し葵は苦い顔で返した。

「あう？　なんか嫌な予感がしてきました」

紗羅はその苦い顔に確かに感じた寒気に体を震わせる。

「……………あう……………そんな……………」

紗羅ちゃんの悲哀に満ちた呟きが聞こえる。

そりゃ、真宮姉妹がまさか……………

「これからはお隣さんだねしょうちゃん。ご飯とかお風呂とか一緒に寝るとか好きな時にしていいいからね。うーん、部屋も用意しよう！　やっぱり、こっちに住んじやいなよしょうちゃん！」

「……………プライベート空間ぐらい用意したあげる。い、嫌じゃなかったら住むべきよ。うん住むべきだわ……………」

沙織、もう少し自信持って喋れ。なんかよく聞こえない。

「駄目です！　しょう君は、私がお世話するんです！」

「駄目な道理がないわ。それはしょうちゃんが決める事」

華織の眼鏡の奥にある瞳が蛇のように輝いた。気がする。

「しょう君は元々この家に住んでるんですから、態態隣に引越す道理はありませんよね!？」

と紗羅ちゃんも猛禽類を彷彿とさせる目で見つめてくる。

えと、なんで俺責められてんの？

「はあ、前途多難ね……………一度言ってみたかったわこの台詞」

あお姉ちゃんは関係ないとはかりに楽しそうに見てるだけだし。

とりあえず、今日は逃げる。

「しょうちゃん!」

「しょう君!」

「正太郎!」

……………逃げれば追われるよなあ……………

六話

燃えている。

別に家とか物とかじゃない。人が、だ。人自体が物理的に燃えているわけじゃなく、闘志が燃えているって事だ。

「おい正太郎、紗羅を……………止めてくれ……………」

今膝を折って崩れ落ちたのは愛さんだ。強靱なバイタリティーを持っている愛がこんな簡単に疲れをみせるなんて。

「正太郎、簡単ではない。明らかに今の紗羅は常軌を逸して……………」

愛の肩に手が置かれた。もちろんその相手は紗羅ちゃんだ。満面の笑みを顔に貼付けて額には玉の汗を浮かべている。

「愛さん、休憩は終わりです。さあ、続きを！」

紗羅ちゃんは肩で息をして、背後からはなにかこう、鬼気迫るオーラが。

「いや待て、全く休憩になってないぞ紗羅！ く、うわぁー！」

あんな愛初めて見たよ。

紗羅ちゃんがこうなったのも昨日の母さんの一言が原因だったりする。

隣に引っ越しをしてきたその日に真宮姉妹が家にご飯を食べに来た。その時の事だ。

「というわけでお義母様、正太郎君を家に招きたいんです。一緒に住むという意味で」

もちろん今のは華織、そしてもちろん紗羅ちゃんが黙っていない。

「急に引っ越しをしてきて、なに勝手に言うんですか！ ここはしよつ君の家なんだからここにしよつ君がいるのは当然の事です！」

お隣りさんが引っ越してったなあ、くらいで思っていたがまさか真宮姉妹が引っ越してくるとは思わなかった。しかも一日で一緒にいた（鞭で叩かれていた）その日の夜に。

そりゃ驚くつてもんだよ。

「よし、なら勝負しよう。チャンスは平等にあるべきだからね。明日は晴れ、そして球技大会なんですよ？ ならそこで決着をつけな

わさ」

と母さんが爆弾を投下してくれたわけだ。俺の意志は一体どこで、どこに言えばいいんだろうか。

「紗羅、待つんだ。体を温めるという意味では了解したが、これ以上は試合までに逆効果だ」

逆効果というか、もう既に疲労困憊の愛さん。ちなみに、球技大会のテニスは人数の関係上ダブルスとなっている。さらにゲームカウントを半分にして時間短縮をはかっている。

「愛さん！ そんな事でどうするんです！」

俺の方の野球は一回戦負け、て事で紗羅ちゃんの応援。

野球をやっていた愛は一回戦負けという事で紗羅ちゃんに手を引かれダブルスの相手にされた。紗羅ちゃん曰く『この負けられない戦いは最も勝つ確率が高い相手を選ばなきゃなりません』んで愛だ。たしかに無駄に運動能力の高い愛を味方につければ素人だらけの球技大会ではそれなりに有利がたつだろう。それに紗羅ちゃんは経験者らしいし。

「ちょっとお姉ちゃんタイム。今試合終わったばかりでしょ？ 休

もうよ、次の試合までなんか飲んでさ」

「なに言ってるのかな？ 沙織ちゃん負けたいの？ 勝たなきゃ、勝たなきゃなんだよ？ 体を最高の状態にし続けないと！」

華織と紗羅ちゃんって結構相性良さそうだよな。

近くで会話してる双子の方を見てたら華織がその視線に気付いて手を振りながら近づいてきた。

「しょうちゃん残念だったね野球。もっとしょうちゃんの格好いいところ見たかったのに」

「いや、あんまし格好いいところなんてないよ。野球苦手だし」

苦手とは思ってなかったが、今日苦手になった。二回のエラーと三振二回はトラウマもんだ。

「えへへ、私達の活躍見てた？」

「ああ、格好よかったよ。俺と違って」

俺は男子クラスメイトに迷惑をかけた事から少し卑屈になっていた。にしても……………

華織を上から下まで見る。格好は上は体操着、下はスパッツ。

体操着が、その汗で、体のラインと下着がつつすら……………

「えへへ、しょうちゃんのえっち」

「ちよっ！ 違うぞ、断じて違う！」

勢いで一步華織に近づく俺。華織はそれに反応して一步下がる。

ん？

一步進む。更に一步下がる華織。

「華織さん？ どうしましたかね？ 俺なんかしたっけ？」

「えへへ」

とだけしか返ってこない。

そついや紗羅ちゃんもタオル渡そうとしたら同じ事されたな。タオルだけ引ったくるように取られたし。

「あの、華織？」

「……………しょうちゃん少し考えてよ」

「へ？ なにを？」

いや、マジでわかんね。なんで華織は自分を抱くようにして頬を染めてんだ。なにかを恥ずかしがってるような感じ？

「だから、汗かいてるのいっばい」

「うん、俺もだが」

「ばかしょうちゃん！」

そう言い残して華織は行ってしまった。いや、確実に分かん。思
春期ってやつか、難しい年頃だねえ。

「いや、百パーセントアンタが悪いわ」

「沙織、はなんか近くね？」

「へ？ そうかしら、私、しっかり汗拭いてるし」

「いや、だから華織はなにを気にしてたんだ？」

「え、えと、女の子だから………じゃないかな？」

なんだか昨日今日で沙織が少し丸くなった気がする。

「む………やっぱり分かん」

男には分からない世界だなきつと。男にも自分の世界があるがな。

「ねえ、今度の日曜だけどさ私と」

「沙織ちゃん！ 行くよ！」

「え！？ お姉ちゃん！ あーっ！ 正太郎ーっ！」

いつも通りニコニコの華織に首根っこ掴まれて引きずられていった。

なんか手持ち無沙汰になっちまった。なにしようかな。

「日向、ちょっといいかな？」

「よくない」

「いいんだな。ありがとうついて来てくれ」

「よくないって言ってるのはいいいっ!」

「これとそれとあれ、運んでくれ」

………確かに手持ち無沙汰って言った。結構「無沙汰」って漢字難しいのによく言えたって感動してたのに。

「日向？ 聞こえたのか？ 返事くらいしたらどうだ？」

なんか高圧的で、俺をなんだと思ってるんだこの女子は。

女尊男卑を地で行きやがって、別に男性が偉いとかは思ってないが、こいつは

「聞いてるのか!？」

「額を叩くな! お前は何を運ぶんだよ。俺だけパシリにしてさ」

「私? 私はこれだ。場所は教えるからそこに今言ったの置いてくれ。ほらはやくついて来い」

「なんであいつはこの体育倉庫の中から謎の紙一枚しか運ばんだ。」

「とりあえず言われた物の一つテニスボールがぎっしり入った買い物カゴを持つ。そういや、なんで買い物カゴが体育倉庫にあるんだろ? ドラマとかでもよくあるよな? 近所のスーパーから貰ってきてんのか。」

「なんだよ、それ一つを両手か?」

「ぐ、本当にこいつはなんなんだ。」

「あのな、クラス委員だからってクラスメイトパシれるってわけじゃないだろ。それに俺以外の男子は!？」

「野球負けてさっさとどっか消えた。お前がいたから頼み事をした。女の子にあんなかび臭い所を何度も行つて重いものを持たせるのかお前は?」

目を細めてこつちを馬鹿にしたように見てくるクラス委員長様。

「確かに、言われれば女の子にはそうしたい。なら、もう少し可愛げある頼み方をしてくれよ」

目を閉じてなんか酸っぱいものを口にいられてるような顔。

「あのね日向君！ 私、クラス委員の仕事でね、体育倉庫から運ばなきゃいけない物があるの。出来れば、その、出来ればなんだけど運ぶの手伝ってくれないかなあ？」

.....

「分かった！ 任せろよ。全部俺が運んでおいてやるよ」

「わあ、私嬉しいな。日向君が優しい人で！」

「おう、女の子にそんな事はさせられないぜ」

「うん、ここに全部置いといてねじゃあね」

.....ちくしょう、可愛いと思った俺の負けだよ。

暑い、汗が顔を伝って顎から落ちていくよ。

ただ物を運ぶだけなのに流石炎天下、歩くだけでも体力がなくなっ

ていく。

こりゃ紗羅ちゃんも華織も沙織も心配だな。愛は心配ないだろうが。

よし、言われた物は全部揃った。紗羅ちゃん達の応援に戻ろう。

ん？人が集まって……………

暑さなんて忘れて俺は走り出した。体中から血の気が引いていく。嫌な予感が嫌なイメージを呼び、頭がパンクしそうになる。

「紗羅ちゃん！」

女子達を抜けた先にはイメージ通りのモノがあった。紗羅ちゃんがコートに倒れている。

「愛、どうすればいい!？」

こういう時俺の頭なんか働かしてもしょうがない。愛ならきつとい知恵を出してくれると思ってるの事だ。

「とりあえず日陰に、それが保健室、後水分……………救急車も必要かもな……………すまん正太郎私がついていながら」

まずいな。『ボク』が抜けてる。愛もだいが参ってるみたいだな。

「おいクラス委員、佐山を頼むよ。俺は紗羅ちゃんを運ぶから」

「お、おう」

お姫様抱っこ。本当に紗羅ちゃんは軽い、上から下までジャージ着て、暑かったよな。

傷を見られたくないからってジャージ着て、あんなに一生懸命で、俺、そんな紗羅ちゃんが綺麗だな、ぐらいしか考えてなかった。情けないな、気付いてやれなくて、ごめんな。

「しょう……たろうくん……私、試合しなきゃ、勝たなきゃ……」

「いいよ、勝たなくても、いいんだよ。俺はちゃんと側にいるからな」

「……はい……」

「あう、ごめんなさい」

病院の一室。とても軽度の熱中症患者が入る場所ではない部屋。

話を聞いたじいさんが鼻水と涙を垂らしながら心配しての所業だ。

病室にソファーなんかないだろ普通。冷蔵庫まであるんだぜ。

「本当だよ。心配した。愛なんて珍しく泣きそうになってたんだからな」

「あつ愛さんには悪い事しました。私の我が儘に付き合わせちゃって」

因みに紗羅ちゃんは着替えたらしく病室の薄い服を着ている。最近、俺にはあんまり傷を隠さなくなった。ありのままを見てほしいそうだよ。だからってネグリジエでいられたりすると私の理性は大変ですかね。

「しょう君、私負けちゃったんですよね？　じゃあしょう君は家を」

「出ないよ。俺の意志を無視した決まり事なんか知らないよ。あの家は大切な家だからね、出ていくなんて真っ平さ」

「あつ、それじゃ真宮さん達が」

「それは今度の日曜日一日俺を好きに出来る権利で納得してくれたよ」

あ、紗羅ちゃんが固まった。と思ったらガタガタと危ないくらい揺れだした。

「あつあつ！　あつ、あつあつあつあつ！」

『あつ語』全開の紗羅ちゃん。俺はそんな紗羅ちゃんに肩を掴まれガクガク揺らされる。首が、首が、なんかいけなくらい揺れてる。

「なんでそんな約束するんですか！？ そんな危ない事しちゃ駄目ですよ！」

「危ないって、大袈裟だよ。別に友達同士で遊びに行くくらい。そろそろ揺らすのやめてくれないかな紗羅ちゃん……………気持ち悪くなってきた」

「あう、確かに負けたのは私ですもんね……………」

しよげているところ悪いんだけどいつ止めてくれんのかな。なんか気が遠くなってきたんだけど。

「紗羅！ じいちゃんが来たぞ！ もう安心…………… 正太郎？」

正太郎——っ！ 紗羅、正太郎が泡ふいてる、やめて、正太郎がいやあああああ！」

ああ……………なんかこの引き方デジャヴュ……………

あれ？じいさん。なんでこんな暗い河原で石を積んでんの？小石を
一体何個積み上げるんだよ。

え？俺も石を積むの？ひらべつたい石があんまりないなあ……………
じいさん、これなんか意味あるのか。石を積み上げるだけなんて。
じいさん器用だな。そんなに石を積み上げるなんて。

「あれ？俺は……………」

「あう、しょう君大丈夫ですか？」

「ああ、なんか首痛いけど」

目の前には紗羅ちゃんの顔、でも視界の横から首が出てる。延長線
上は天井が見える。寝てるんだよな俺。

「あれ……………膝枕？」

「あう、なんか今だって感じなので」

「そっか……………でも紗羅ちゃんの膝、硬いね」

「あう？」

首傾げる紗羅ちゃん可愛いな。あはは、そう、紗羅ちゃん可愛いんだ。だから紗羅ちゃんが今離れて冷蔵庫を開けた音なんて聞こえないぞ。

「はいしろう君」

紗羅ちゃんが冷たいお茶を差し出してくれたなんて認めないぞ。この膝がじいさんのものだなんて認めてなるものか！

「正太郎、頭、結構重いんだな。じいちゃんうれしグボオ！」

いや、認めない、認めないぞ！膝枕がじいちゃんの硬い膝枕だったなんて断じて認めない。ソファーに寝かせてくれるなら、膝枕なんて必要なかったじゃないか。そのままソファーに寝かせてくれよ。

「しろう君、本当は私がする予定だったんですが、救急車に乗ったばかりの私は駄目だって御祖父様が」

「そっか、それで御祖父様って？　じいさん来てるの？　小さいからねあのじいさん、よく見えないや」

「え？　そこにうずくまって、しろう君の頭突きが顎に当たったから」

「え？　紗羅ちゃんに言ってるのかな？　じいさんなんていないじゃないか。じいさんは今頃石を積み上げるので忙しいんだからさ」

紗羅ちゃんはまだなにか言いたそうだったが、諦めてくれてベッドに戻った。

そこでノックの音、

「中城さん、大丈夫？」

この声は華織か。とりあえず近くにかかっていた羽織る物を紗羅ちジャージやんに渡して、小走りで入口に。

「よう、華織と沙織、愛さんじゃあーりませんか」

「なんだそのキャラは。紗羅に会わしてくれ、ボクは謝らなければ」
ジャージは着れたよな。上だけでも着れたよな。

「あ、愛さん。真宮さん達も」

「紗羅、元気そうだな。良かったよ」

小走りで駆け寄る愛。余程心配だったんだろう。

「はい、ご迷惑をかけました。愛さんには無理までしてもらったのに」

「なあに、あれくらいどうって事ないさ。紗羅の体調を気遣えなかったボクにも落ち度はある」

二人でお互いのフォローのしあいを始めた。見ててなんだか微笑ましくなる光景だな。

「あ、アンタまだ着替えてなかったの？」

沙織が後ろから声をかけてきた。そういや体操着のまんまだったな。昨日もなんだか体操着でいた時間が長かったような。

「……………」

「沙織ちゃん、いくら匂いフェチだからってそんなに男の子の側に行くのははしたないんじゃないかな？」

「ふえっ！？　ちが、誰がこんな汗くさい男なんて」

「汗くさい……………よな。着替えてくる……………」

「え？　着替えちゃうの？」

「いや、着替えるよ。風呂入りたいし」

やっぱり人生は風呂、そろそろ夕方だし、家帰って風呂入って一日を終わりたいな。一日の終わりの風呂は大事だよな。

紗羅ちゃんは帰れるよな。元気そうだし。いや、大事をとって一泊かな。

あお姉ちゃんはそういやどこに行ったんだろ。真っ先に来てくれると思ったのに。斎藤さんもそういやいないな。じいさんはいるのに。

「しょうちゃん？　ボーツとしてるよ。大丈夫？」

「え、ああ、ちょっと考え事。すまんすまん」

「今週の日曜日のデート、楽しみにしてるね」

「デート？ 一日パシリじゃなく？」

あ、華織と沙織が固まった。ってなんでだ？

「正太郎、アンタまた？」

「しょうちゃん、デートだよ、で・え・と！ 服とかもすっかり気合いいれてきてよ！」

「そうね。服とかいつも通りはやめてよ。私達も気合い入れるから
えと、普段着で、いいんだよね。女の子だけだよね気合い入れるの
って。」

「沙織ちゃん、日曜日はしょうちゃんの服とかも見ましよう。少し
オシャレに気をつかってもらわなきゃ」

「賛成」

なんか嫌な予感してきた。

そんなこんなで日曜日。紗羅ちゃんの恨めしそうな顔に見送られながら家を出た。

なんだか紗羅ちゃんが病院に運ばれた日からあお姉ちゃんの元気がない。あお姉ちゃんらしくない失敗もするし。あお姉ちゃんが味付けに塩と砂糖を間違えた時は本当に心配した。

でも、本人は決まって『大丈夫』しか言わないんだよな。悩み事かな。あまり悩みすぎなきゃいいんだけど。

「あれ、沙織だけか？ 華織は？」

お隣りの家の前に立っていたのは沙織だけ、眼鏡のお姉さんの姿が見当たらない。

そっぴや、紗羅ちゃんから言われてた事があつたな。

『しょう君、必ず女性の服は褒めて下さい。きっと沙織さんの方は喜びますよ。沙織さんの方は、ですけどね』

なんか紗羅ちゃんの笑い方が気になるし華織はどうなんだって思うが、目の前にいるのは沙織のみだ。とりあえず、褒めた方がいいよな。服に気合い入ってるのは見て分かるし。

「えと、今日の服似合ってる、ぞ」

うわあ、予想以上に面と向かって言うの恥ずかしい。なんか顔熱くなってきた。

「え？ あ、そう。ありがとう、とう」

なんだこの空気、くすぐった過ぎるぞ。

「にしても今日暑いな。空調の下に早く入りたいぜ」

「そうね。でも、クーラーに頼り切りの生活はあまり褒められたものじゃないわ」

「へえ。沙織は暖房と冷房なきゃ足をバタバタさせて怒るシテイ派お嬢だと思ってた」

「あ、アンタ私をなんだと思ってるのよ。夏は暑い、冬は寒い、四季を楽しむのも日本人よ」

意外に立派な考えを持ったお嬢様なこと。海外暮らしが長いから四季があるのが珍しいだけだったりしてな。

にしても、紗羅ちゃんもたいがいスタイルは良いけど、沙織はモデルみたいな体型だな。今日は黒を基調とした大人っぽい感じだけど、夏場だし露出のせいか細身なスタイルの良さが映えるな。

「なに？ ジロジロ見ないでよ変態」

「すまん。その、結構綺麗だったからつい、な」

「つつ！！！？」

急に顔を真っ赤にする沙織、俺も自分で恥ずかしい事を言ったと気付き視線をそらす。

「……………アンタにしては気の利いた事が言えたと捉えるか、実は軟派な男だったと捉えるか」

「ほら、さっさと行くぞ。デートなんてしたことないからな、作法とか分からんからな」

「私だって、知らないわよ」

やっぱりぎくしゃくな空気になっちまうな沙織と二人きりじゃ。華織が間にいてくれないと沙織とじゃ持たないなあ。

「やり直し」

「はい？」

「やり直し！」

俺と沙織が待ち合わせ場所兼今日買い物をする場所である、便利だが、近場で俺は大体揃っちゃうからあんまり行かないや、って感じの大型ショッピングモールに着いて華織を見付けて近寄った第一声がこれだ。

珍しく沙織と声を合わせて、お互いに見合ってしまったほどだ。

「沙織ちゃん、私の格好見て」

「え？ えと、清楚系？」

俺の感想も沙織と同意見だ。

沙織と違って年相応の白を基調としたイメージを受ける格好だ。眼鏡がより落ち着いた雰囲気強くする。

「沙織ちゃんは私に合わせて着替えて。しょうちゃんの趣味を見誤っちゃ駄目だよ」

確かに容姿が瓜二つの二人の格好を見比べれば、沙織も新鮮だし格好良いと思うが、近寄りやすい印象を受ける華織のほうが好きだが。

そんな俺に合わせる必要なんて。

「うんわかった。えと、着替えはお店？」

え！？着替えるの！？しかも即答！？

「うん、先に行つて。私は少ししょうちゃんにも話があるから」

と言うと沙織は小走りでショッピングモール内へと行ってしまふ。

「しょうちゃん？ この格好どうかな？」

「あ、ああ、似合ってる。可愛いぞ」

あれ？どうして華織は溜息ついて眉間にしわ寄せるんだ？

「あ、り、が、と、う」

ああ、ばれてる。紗羅ちゃんの入れ知恵ってばれてるよ。

本当に華織は紗羅ちゃんにライバル意識持つんだから。本当、仲良
くしてほしいぜ。

「後、しょうちゃんもお着替えね」

「え？」

「適当に洗濯してあるシャツとジーンズの隣を歩く気は私も紗織ち
ゃんもありません」

きつぱりと否定を断言された俺の普段着。

そんなこんなで、俺も紗織も着替え完了。

そして、空調のきいたショッピングモール内。

それも、俺が一人では死んでも来ないだろうブティックとか立ち並ぶ、所謂お洒落ゾーンだ。

こつこつキラキラしたとこ嫌いなんだよな。

このショッピングモールは映画館もあるし、食うものにも困らんし、友達と遊んでると時間があつという間だが、今日はそうはいかんだらう。

「うー、この服なんか窮屈だ。俺こんなお洒落したってこの周りの雰囲気は溶け込めてないだろ？」

「そんな事ないよ。私のチョイスは間違つてない、沙織ちゃんなんか照れちゃつてしようちゃん凝視出来ないんだよ」

と左側を歩く華織に言われて、俺を挟んで歩く右側の沙織を見る。

「な、なによ！？ 確かに、似合ってる。でもお姉ちゃんのセンスだからね」

最近丸くなったと思つたのに、すぐにこれだ。華織がいてくれてよかった。

「沙織ちゃん？ お姉ちゃん怒るよ？」

と言われて沙織が小さくなる。

「俺を挟んでケンカするなよ。俺がこんな服を選ぶセンスがないのは間違つてないんだから。にしても、沙織の格好、さっきもよかつ

「ただ、今も可愛いぞ」

なんか今日の俺調子に乗ってるわ。こんな軽口普段ならかけらも出て来ないだろうに。最初に沙織を褒めて喜ばれたから調子に乗ってるな。

「あ、ありがとう……………軟派男」

お礼と罵りが一緒なのは沙織クオリティだろう。仕方なし。お礼言われただけよしとしよう。こんな馬鹿の一つ覚えみたいに格好を褒めるだけで、怒られなかっただけな。

華織には紗羅ちゃんの入れ知恵と一瞬で看破されちゃったけど、沙織の嬉しそうな顔を見るからか華織は沙織に俺の軽口の真相を伝えようとしないし、ばれたら更に険悪になりそうだからそれは嫌だが。

「それで？ どこ行くんだ？ どこでも付き合っぜ」

両脇を歩いていた双子がピタッと止まる。

必然、俺は少し進みすぎてしまって、振り返る。二人とも死んだ魚の目をしていた。

今の俺の発言は確実に地雷を踏んだらしい、さてどう罵倒されるか。

「しょうちゃん、私、前にも言ったよね？」

前？ああ……………確か、華織と二人で出掛けた時になんかお叱りを受けた気がする。

「沙織ちゃん、こんなことで怒ってたらしょうちゃんとのデートはもたないよ。昨日言ったから大丈夫だよな？」

「そういうお姉ちゃんが既に大丈夫そうじゃないよ」

いや、二人ともなんかめっちゃ怒ってますやん。どっちも大丈夫そうには見えへん。

「急にそんな言われても、俺なんかしたか？　なんか間違った事を言っただけだし」

伊達に俺だって女所帯で暮らしてないんだ。こういう時の対処法だってバツチリだぜ。

「ごめんなさい。空気の読めてないこの馬鹿に今の失敗を教えてください」

平身低頭、大きくならないで小さく、小さく、悪くなくても謝るんだ。これが大人ってもんさ。

正太郎はちよつと悟りを開いた気がした、少し何かを失った。

「はあ、本当にしょうちゃんは仕方ないよね」

嘆息しながらの華織、男が力を持った時代はとうの昔に失われ、今は男女平等、しかし、俺の現状には平等さなんてない。なんてことだ。

「しょうちゃんは今日の事なんにも、なあ〜んにも考えなかったの

「？」

「あ、ああ、全く」

「さいて〜」

沙織が合いの手を入れてくる。そこまで俺は重大な事をしたのか？俺悪いのか？

「私達が『デート』と言ってるんだから、少しはワクワクしたり、期待したりしなかった？」

「一体何を期待するんだよ？俺は買い物に付き合うだけだと思っ
てたし」

なにかを言うにもただ、男の意見を付け足したかっただけかな、と最初は思ってたし。

「女の子にもよるけど、場所は伝えてあったんだから、『私達の事を考えた上で』少しはデートを考えてほしかったな」

『私達の事を考えた上で』って事は、俺が行きたいところに行くのではなくて、華織と沙織が楽しめる場所を考えろって事だろう。女の子ってそういうの気にするんだな。

「もちろん、引っ張っていきたいって女の子もいるからアレだけど、私と沙織ちゃんはどうちゃんに引っ張って行ってほしいな」

むむむ、さっきから華織は随分と下手な態度だ。沙織だったらケンカして終わりだろうが、優しく諭すような華織の態度には出来るだ

け誠実に応えなきゃいけない気になる。

ただ、子供扱いされてるだけの気もするが。

「なら、一緒に考えてくれよ。俺は沙織の趣味とかそこまでわからないし」

ハッと驚いた顔した華織がこっちに小走りで寄ってきた。そして、俺の手を握り一緒に祈るように少し手を持ち上げ、目をうるうるさせて見上げてくる。

「そうだよ！ 私的にはかなりの高得点の答えだよ。沙織ちゃんはどうかかな？」

「別に……………」

「ほらしょうちゃん高得点だよ」

そんな上気して言っても、沙織さんは全く高得点の顔はしてませんよ。

にしても、なんだか疲れる。沙織に気を遣ってやらなきゃいけない気がして、なんだか沙織ときこちなくなっちまうな。華織は俺の事を好いていてくれるから上手くいくが、沙織から向けられる感情をそのまま返したら険悪になる。どうしたものか。

好意を持たれてるっていう設定のはずなんだけどなあ。

「とりあえず、服、秋物を見て回りたいかな私は」

と沙織。

まだ夏なのに女の子も服屋も気が早い、俺なんか夏の服も去年の着回しなのに。今着てる服が今年初の夏物って事になるな。

「沙織ちゃん、しょうちゃんは去年の服を着回すくらい格好に無頓着なんだよ？　しょうちゃんも楽しめるのが前提条件でしょ？」

あれ？俺今口に出したか？

「たしかに今年初の夏物が今着てるやつだとか言う奴だけど、だからこそ格好には少し気を入れてほしいっていうか……………」

華織に対してだからか少し自信なさ気の沙織さんも、なんで俺が心の中で言った事を知ってるんだ？

「それはたしかにあるけどお……………まずは、今日のデートは遊ぶだけにしましょ？　格好とか私達の好みを知ってもらうのは追い、ね？」

「そうだよね。うん、わかった」

なんとというか、華織は凄いな。俺とだとあんなに上手くないか、華織も華織だと素直に言うこと聞くし、俺だって華織と喋ると上手く華織のペースに乗せられて、華織のしたいように誘導されてる気がする時もあるくらいだし。喋り上手って言うか、口が上手い……………この言い回しだとなんか悪口みたいだがそんなことはなく、本当尊敬する点だねそれは。

「と、いうわけで今日はここだあ！」

話しながら歩いてきて、華織が指定した場所は

「映画館か……………」

「はー、楽しかったねえ！」

「そうね、悪くなかった。うん、悪くなかった」

「ペ？」

「とか言ってる、沙織ちゃんは今しょうちゃんの隣に座れたのが嬉しいんだよね？ 本とかでそういうの憧れてたみたいだし」

「ちよつと！ お姉ちゃん！」

「みゆ？」

「しょうちゃんは映画どうだった？」

「みゆーん？」

「なによそれ、真面目に答えなさいよ」

「みよん!？」

「な、凄まないですよ。キモい奇声で凄まれたらちよつと怖いじゃない」

「つよつばよまゆ」

「しょうちゃん、今のどうやって発音したの………?」

「またか!この状況またか!？」

「なんか俺、記憶飛んだんだけど!？ またなんかファーストフード食ってるし!」

「また俺の奢りか?」

「なによ、さつき気前よく『服の礼もあるし、デートなんだから少しカツコつけないきゃな。お前達みたいなお嬢さんの口にあうかわからんが、ここぐらいは奢ろう』って言ってたじゃない!」

「わっ、少し似てたよ沙織ちゃん」

「落ち着け、冷静になれ。K O O Lになるんだ俺。」

「C O O Lだよしょうちゃん」

「そっかさんきゅ華織」

「どういたしまして」

.....あれ？

「どうしたのしょうちゃん？ 話の途中だったのに、描写が面倒になって無理矢理時間を飛ばされてしまった小説の主人公のような顔をして」

.....戦慄ッ！

私が覚えたのは進むような戦慄！

血が全て液体窒素に換えられたかのような寒気、いや、これ寒気じゃすまないやん。

「なに自分でカッコイイ文章作ろうとして、失敗して我に帰ってるのしょうちゃん？」

ニコニコ、華織の笑顔がこんなに恐いとは思わなかった。沙織もなんだかたじろいであるし。

本当、時間が飛んだのは一体なんだっただろうか。やっぱりこのフアーストフードになにか秘密が.....

結局、三人がしたい事を順番にしようという事になり、女の子の買い物タイムに突入、俺の番がくることもなく、家路につくことになった。

夕暮れの中、二人の間に挟まれて歩く。流石は双子、出す足とタイミングがピッタリ一緒になってる。

とか考えてると、

「しょうちゃんごめんね。なんだか熱中しちゃって」

「私も、悪かったわよ」

珍しく沙織が申し訳なさそうにしている。なんか、いつもの高圧的な態度からだど新鮮で、やっぱり少し可愛く見える。

まさか、これがギャップ萌えというやつか!?

「なにニヤニヤしてんの？ 女の子をそついつぶつに見るな……」

蹴り一つでも飛んでくるかと思ったが、なんかしおらしく引き下がりがった。

「また出掛けようねしょうちゃん」

「ああ、今度からは、沙織もな」

華織の方を向いていた俺は、ちょっと反応が気になって沙織の方に顔を向けた。

「え？ う、うん、予定がなければ行つてあげる……………」

「もう！ 沙織ちゃんはもう少し素直に」

家までもう少しといったところで目の前に車が停まった。

多分あれだろう。今日の夜は親との食事の約束があるらしいから、その車だろう。

家の前まで行く途中に見つけたつとところだろうな。この黒塗りの高級車は、本当にお嬢なんだよな。

「少しは空気読みなさいよね……………」

あれ？今の声、華織の方から聞こえたような？

キヤラ的には沙織が言いそうなのに

「本当にしょうちゃんは行かないの？」

「流石に家族の食事の邪魔は出来ない」

「そんなことないよ、家族になるかもだし、ね沙織ちゃん」

「……………行かないの？」

そんな俯きながら上目遣いで言っな、狙ってやってんのかこの女の子は。

「いや、今日はやめとくわ」

「うん、仕方ない。ほら、沙織ちゃんいこ？」

「うん、しょうち　　正太郎、また」

「ああ、またな」

その後、泣きそうな紗羅ちゃんに今日の出来事を事細かに聞かれ、よかったよかったと言われた。

なんか着ていた服も褒められた。

あお姉ちゃんの様子も回復してるみたいで、母さんもいて家族での食事が出来た。

やっぱり家族っていいよな。

出しているのか悪いのか、弱気に逡巡してると声をかけられた。

恐ろしいくらい美人、桃色のドレスがよく似合う……………この人だつたら何を着てもこの人のために用意された物にしてしまいそうなくらいの美人。俺の周りの女子は美少女揃いだと思っていたのに、彼女はそれに劣る事は絶対ない人だ。

それと……………ドレスのせいで露出されている谷間に目がいってしまう。紗羅ちゃん以上か、確実に紗羅ちゃんクラスはある上半身の一部。

俺に声をかけていて、俺が返事をしないから首を傾げてるんだろうが、その仕種も愛くるしい。

「えと、その、俺に何か用ですか？」

「はい、御用ですよ」

俺を拝むように手の平同士を合わせる仕種も可愛い、仕種に合わせで強調される部分にも目がいってしまう。声も、なんて言えばいいのかな、鈴を鳴らしたようとか言うのかな、声優さんみたいにめっちゃくちゃ可愛い。

「正太郎様、ですよね？」

「はい、日向……………ここはじいさんの親戚やらが集まってるから、日向だらけか。正太郎です」

「あつ、でも私は日向じゃありませんよ？ 日向の血筋でもありません」

「あれ？ 日向が集まるパーティーじゃなかったんですか？」

「いえ、そういうパーティーです。私は日向の人間と婚約してるんです。それで、招待されたんです」

ああ、そういう事か。納得納得。

美人さんだけど案外話しやすい人だ。気さくな感じもそうだし、なによりこつちを気にかけてながら会話してくれてる。ちよつと大人っぽいもんなこの人。

「って婚約？ 随分と……………気が早いんですね」

「違いますよ。許婚です。親が勝手に決めた婚約ですからあんまり気乗りはしません。が、仕方ないですよ。日向とコネクションを……………失礼しました。いらぬ事を喋りましたね」

「あつ、いえ！ 俺こそごめんなさい、あんま考え無しに好き勝手言つて」

無配慮、が正解な気がしたが、俺の語彙にそれを操る力はなさそうだ。

「駄目です」

「え？」

「私の失敗を許してくれたら許しますよ」

「あ、ああ、はいわかりました。この事は水に流しちゃいましょう」

「はい、賛成です」

「一々仕種が可愛い人だ。飾った感じがしないというか、美人がやる可愛い仕種が絵になるから違和感を感じないだけかもしれないが。」

「名前を名乗ってませんでしたね。失礼しました。泉堂せんと堂かぐやと申します。ちなみにかぐやは紛れもなく私の本名ですよ」

「かぐやさん、改めてよろしくです」

「失礼にあたるかもだが、最近流行りの自己主張が激しい名前だな、と思ってしまう。個性を意識するのは悪いことじゃないだろうが。」

「はい、よろしくお願ひします正太郎様」

「なんだか懐かしい呼び方をされてる気がする。」

「正太郎、呼び捨てとかにしてください。様、とかつけてほしくないので」

「え？ そんな殿方呼び捨て……………」

「かぐやさんが急に頬を朱に染めた。」

「なにか逡巡するように俯いてぶつぶつなにか言っている。そして、深呼吸を始めるかぐやさん。」

「で、では、しよ、正太郎？」

「はい、姫」

「……………姫？」

「かぐやさんだから姫、やっぱ失礼でした？」

さっきの反応を見るに『かぐや』って名前をコンプレックスにして
そうだから、名前で呼ぶのは控えた。

「いえ、いいですよ。姫だなんてちょっと自意識過剰気味ですけど」

「そんな事ありませんよ。姫みたいな人に姫って漢字はあるんです
よ」

「まあ、お上手ですね正太郎は」

なんかフランクな間柄が確立されてきてる気がする。友好的にする
のはいいけど、この場にはいずれ姫が結婚する男性もいるんだろう
からあまり男と仲良くするのも考えものだよな。

「そついえば用事ってなんですか？」

「用事？ ああ、お話が楽しくてすっかり忘れてました。と言って
もお話するのが用事だったので、日向の御祖父様が正太郎に会って
みると面白いぞ、と言われたので」

日向の御祖父様とはじいさんのことだろう。面白いぞ、だなんてじ
いさんは俺をなんだと思ってるのだろうか。後でお尻ペンペンだな。

「そうですか」

上手い返答が出来そうになかった俺は、ちょっと素っ気ない返事を
してしまう。

「あつ、そんな興味だけで近づいてきて、失礼でしたよね？ ごめ
んなさい」

沈んだ顔も綺麗だな、と思いつつ、態とオーバーに両手を振って、

「違います違います。別に気を悪くなんてしてません。俺の取り柄
は『バカ』と『面白い』と『パジャマ』しかないですから」

「それなら良いのですが……………パジャマ？」

「パジャマ、寝巻き、寝る時に人が着衣する至高の一品です。人間
の文明が飛躍的に進歩したのはパジャマにあると高名な学者先生が
そんな言葉を遺したそうです！ 故に！ パジャマとは愛である！
そう私は言いたい、全ての人に、否、この地球に生きる者全てに
！」

「は、はあ……………」

「時に姫、貴女、寝る時の格好は？」

「普通のパジャマ……………です」

普通のパジャマ、なんと素晴らしい事が、なんと喜ばしい事が、黒
髪長髪の大和撫子な姫には着物も似合いそうだが、やはり女性はパ
ジャマだ。アメリカンだろうがアフリカンだろうがジャパニーズだ
ろうが、全世界の女性はパジャマじゃなきゃいけない。そうだ、人

類パジャマ計画を発案し、実行するのはどうだろう。人の個性等パジャマに淘汰されてしまえば……………

その前に大事な事を姫に聞かなくては

「素晴らしい！　して材質は？」

「シルク……………だと思えます……………か、顔が……………近いですよ」

「シルク、最近お嬢様ばかりと仲良くなってよく聞く名前になりました。しかし、人間の技術の進歩はパジャマに顕著に現れると偉大な先人達も口を揃えています！　人間の作った化学繊維もパジャマとして」

「おい！　お前なにやってんだ！」

その声と共に俺の視界が一気に横に流れた。頬になにか当たって、自分が倒れてると気づいたのは頬を手で触れてからだ。

「正太郎！　大丈夫ですか！？」

「……………え、ええ大丈夫、です」

俺は自分が元いた場所に目を向けた。

金髪が肩にかかってウザいくらいの髪型の目付き悪い男が、周囲にドレス姿の女性を何人も侍らせながら笑っている。

「おいおい、きたねえ手で俺のかぐやに触んなよ」

コイツが姫の婚約者、ちょっと俺もパジャマでヒートアップしていたし、婚約者がいる女性の手を握ってたのもよくないよな。殴るまでしなくてもいいかなと思うが、それでも殴られてもある種当然だ。謝ろうと思いいながら立ち上がった。

「あの」

「大輝様！ 理由がどうであれ人を殴るなんて！」

「ああ！？ かぐや、お前が俺に指図かあ！？」

姫に謝罪の言葉が遮られた。

にしても、この男なんか嫌な奴だな。

「しょう君！ だ、大丈夫！？ 怪我はないですか？」

男の後ろ、取り巻きの間から紗羅ちゃんが駆け寄ってきた。赤いドレスだなんて派手だけど、よく似合ってるじゃないか。とっても綺麗だ。

「大丈夫大丈夫、紗羅ちゃんが遅かったね。ドレス似合ってるね」

「あう、ありがとうございます」

「おい！ この奴隷娘、ドリンクどうした？」
今、あの男が信じられない事を言った気がする。取り巻きの女達がクスクスと笑い、紗羅ちゃんが俯いている。どうやら聞き間違いないようだ。

「はい……………ただいま」

紗羅ちゃんが俺から離れる。向かう先はドリンクが置いてあるテーブル、そこに立ってる執事らしき人に笑われながらグラスを受け取り、奴に渡す。

「うわ、本当に持ってきた。こんなばつちいの飲めるかよ。この奴隷娘が」

あろうことが、目の前で起きてる事は現実か？

大輝と呼ばれた男はグラスを傾けて紗羅ちゃんの頭からそれをかけた。

それを見て、俺は即座に紗羅ちゃんに駆け寄る。

なんで今の今まで動けなかったんだ。なんで俺は、俺は、アイツが紗羅ちゃんをどう見てるかわからなかったんだ。

崩れ落ちて泣き出した紗羅ちゃんを抱き寄せて、男を睨みつける。

「アツハツハツハ！ 可哀相だよなあ。俺の一声で、日向正太郎を潰せると言ったらまた奴隷娘に逆戻りしなくちゃだもんなあ。そりゃ俺の言うこと聞くよなあ？」

じゃあ紗羅ちゃんは俺の為に。

「しょう君……………しょうく、んが……………しょう君しょうくん……………しょうくん……………くん……………」

つくづく、本当に、どうしようもなく、どこまでも、有り得ないくらい、俺は愚かだ。これが終わったら紗羅ちゃんが望む事なんでもしてやるう。なんだって紗羅ちゃんの為にしてやるう。

「おお姉ちゃん！ 紗羅ちゃんを頼む」

「はいはい、了解」

とりあえず呼んでみたら背後からおお姉ちゃんが現れたので、紗羅ちゃんを渡す。それでおお姉ちゃんはその時に俺に一枚の紙を渡してきた。

紗羅ちゃんを抱きしめながら、さがっていくおお姉ちゃん、俺はその場で紙を見る。

なるほど、それなら奴に負けないな。

「大輝様なんてことを！」

「姫、俺に任して」

そう言つて肩に触れると姫は黙つてくれた。

頭の中が爆発しそうだ。冷静でなんかいられない、体の中が熔鉱炉にでもなつたみたいだ。熱くて、熱くて、熱くて仕方ない。

おお姉ちゃんの手紙に殴るな、と書いてなければとつくに殴り掛かっている。

「ああ！？ また人の女に触れやがって」

「あ！？ 人の大事な人に酷い事言っつて、酷い事してなに言っつてんだ！？」

「言っっちゃうね言っっちゃうね、俺、日向の次期後継者よ？ 祖父様の全てを俺が受け取んの、それで俺は」

「知るか！ それで？ 権力で俺を潰す？ やれよ、やってみろよ！ 俺の大事な人を傷つけたお前も今ここで潰してやる！」

「言っじゃねえかこの野郎！」

「なら勝負しろ。俺が出す条件で」

「はい？ お前頭沸いてんの？ 俺がなんでお前程度に時間割かなきゃならないわけ？」

ちくしょう、やっぱり乗ってくるわけないか。俺の口がもっと上手ければよかったのに。馬鹿な俺には

「勝負、受けたらどうだ大輝？」

この声は、じいさんだ。

なんだ、じいさんがニコニコしてる。いつも通りの好々爺然とした態度、しかし、その裏にある感情がはつきりと体から出ている。怒りだ。見てたんだ。紗羅ちゃんの事、じいさんは見てたんだ。

それでじいさんはなにも言わず、なにもせず俺に任せようとしてい

今回ばかりはじいさんの期待に応えなくちゃなんない。

「じいちゃん！？ 待ってよ、僕がなんでこんな庶民の勝負受けるのさ？ 時間の無駄だろう？」

「大輝、正太郎はちなみにお前の下の後継者候補だ。血で順当に行けばお前が俺の後を継ぐが、正太郎に血さえあれば順当は正太郎だ。俺の息子の子だしな」

「だからこの庶民には血が……………」

「なら日向の人間と結婚しちまえばいいだろ？ それに力さえあれば正太郎は俺の後を継げるさ。俺の息子の子だしな」

なんなんだこいつら、『血』とか『後継者』とか　ばっかじゃねえの！？

「うるさい！ そっちの話はなんだっていい。勝負は受けるよこのクズ野郎」

本当下らない。今俺は一刻もはやくあの大輝とかいう野郎に頭を下げさせたい。紗羅ちゃんに、紗羅ちゃんの涙を俺に見せやがったクズに謝らせる。

「ちつ……………いいだろう。女を生かして日向に取り入ってきた狡猾な息子の力見せてもらおう」

……………

「なら賭ようぜ。お前が負けたら紗羅ちゃんに謝れ、それと」

「はっ、俺が勝ったらどうする気だい？」

「俺の人生やるよ。奴隷でも執事でも好きに使えよ」

「ギャハハハツ、馬鹿かお前。こんな勝負に人生賭ける？ 漫画の読みすぎじゃね？」

あんな下品な笑い方出来る人間が漫画の外にいることも驚きだよ。

「後は姫、かぐやさんを賭ける」

「はあ！？ なに言ってんだお前！ そんなの認められるかよ！」

理由はない。ただ、あんな奴と結ばれなきゃいけない姫に同情しただけ。友達になった人の結婚相手があんなクズなら日向の中でもっと良い男を探した方が………いや、好きな人と結婚するのが一番だ。

「認めます。私の旦那になる男なら、どんな小さい勝負でも負けは許しません」

「かぐや、俺が許可する。大輝、それで勝負しな。後継者の査定も兼ねる勝負だ」

姫と更にじいさんにこう言われては大輝とかいう男もたじろぐ。

後は、勝つだけだ。

勝負の内容は簡単、トランプ勝負だ。大輝と向かい合うようにしてテーブルにつく。

ルール。

『裏向きでスプレッドしたトランプの中から一枚引く。このトランプの数字の高さで勝敗をつける』

『ジョーカーを一枚入れた53枚』

『一番高い数字はジョーカー、その下はAとする』

『しかしジョーカーが一番低い数字2に負ける』

『五回中三回先取で勝利』

とてつもなく簡単で、『運』だけの勝負だ。頭を使わない勝負。

「カードは僭越ながらこの斎藤がシャッフル及びスプレッドします」

斎藤さん、なんだか久々の登場にちょっと得意げだ。

あお姉ちゃんの指示通りの展開になった。頭を使わない『運』の勝負なら勝ち目が俺にもある……………というわけじゃない。負けないう勝負を選んだんだ。

「ちっ、5だ」

「俺は6」

地味であっさりな勝負だ。だから劇的な展開や、高度な駆け引きはない。否、高度な駆け引きってのがあっても俺はそんな事を考えない。そんな頭ないのだから。

「よし！ Kだ！」

「A」

「なっ！ ちょっと待てよこの野郎！ なんかイカサマしてんじゃねえか！？ 二回連続で俺より一個上の数字なんて」

「この斎藤がイカサマ等させません。坊ちゃんは『運』だけで引いております」

「嘘つけ！ 坊ちゃん、なんて呼び方してひいき目が」

「斎藤さん、申し訳ないけど姫に代わってもらえませんか？ 大輝、だったよな。勝負を最初から仕切りなおそう」

「……………お、おっ」

斎藤さんが一瞬笑った気がした。

一礼した斎藤さんはテーブルから離れ、代わりに姫がテーブルの横につく。

「正太郎、本当に私でよろしいんですか？」

「それはその大輝さんに聞いてよ」

姫が大輝の方に顔の向きをかえる。

「当たり前だろ？ 君は俺の勝利の女神さ」

残念だな、この大輝って奴はなんにも理解してない。

「ジョーカー！ やったぜ！ 流石はかぐやだ！ 勝利の女神！」

本当馬鹿だな、勝利の女神は、

「俺の勝利の女神だったみたいだな。2だよ」

これで一勝。『有り得ない』とかまだぼやいていたが、今度はそんな言い訳はさせない。

次の勝負は、

「3……………くそ」

「俺はジョーカーだ」

これで二勝、斎藤さんのも含めて四回勝負したが、全て俺の勝ちだ。

こんなのはただの『運』

「後一勝だよ。大輝さん」

本当はかけらだって『さん』なんてつけたくないが、時間が経って少し怒りが落ち着いてきた。冷静に考える事が少しだけ出来る。

まあ、それでもコイツは許さないけどな。

「……………おかしい……………おかしいじゃないか!? なんてこんな結果に」

「いい加減になさい! 正太郎は正々堂々勝負してるじゃないですか」

「かぐや、だって俺は」

「さあ、早く次を引きなさい!」

俺はなんて言ったらいいかわからず、呆然とそれを見ていた。

そして、震える手で大輝が引いた。裏側のまま自分の手元まで持つてこようとして、落つことした。

テーブルの上に落ちていくトランプは、表側になってテーブルに落ちきった。

『2』

残りトランプから、まだ引いてない俺の負ける確率は52分の1。
引き分ける確率もあるが、負けはほばない。

俺はトランプに手を伸ばした。

「待て！ 待ってくれ！」

「待たない」

俺はトランプを引き、裏向きでテーブルにたたき付けた。

「さて、これを引いたらお前は、紗羅ちゃんに謝って、姫との婚約を解消。そして、父さんは本気で母さんを好きになったのに、失礼な事を言った事も謝ってもらうぞ」

「わかった！ 謝る！ 謝るから許してくれ！ かぐやとの婚約解消は嫌だ！」

「じゃあこの場で俺の父さんと母さんに謝れ」

「い、ごめんなさい！」

「じゃあこれは姫との婚約解消のかわりだ！」

頭を下げて、上げた瞬間の顔面に拳を見舞ってやった。

「じゃあなクス野郎が」

紗羅ちゃんが心配になって俺は探しに行くことにした。

鼻を押さえて騒いでいる大輝を尻目にかぐやはテーブルの裏向きのトランプをめくった。

つくづく。

面白い殿方だ。

ピエロが笑うトランプを束に戻してかぐやはそこを立ち去ろうとした。

「どうだ？ 正太郎は面白かったか？」

「はい、とつても。私、正太郎のお嫁さんになろうと思うのですがよろしい……………ですよね？」

疑問で聞いた意味合いはない。もう、かぐやは決めたのだ。初めて好きになった男性に嫁ぐと。

「いや待て、正太郎には相手がいてね……………諦めてくれたらじいちゃん嬉しいなあ……………」

「私、初恋を諦めるなんて死んでもしたくありません」

自分の成すべき事、自分の愛すべき人を確信した乙女は駆け出した。

「かぐやー！ 待て！ 待ってくれえええっ！！」

「しょうくん、私……………」

「気にしない方がいいよあんな奴。紗羅ちゃんを虐めた悪い奴は俺がぶっ飛ばしたから、もう怖い事なんてないよ。それと……………ごめんね、守ってあげられなくて……………守るって約束したのに」

屋敷内のある一室、この馬鹿みたいに広いパーティー用の屋敷の中を闇雲に探しても紗羅ちゃん達がいる部屋は検討できなかったため、その辺にいた執事さんをつかまえて聞いた。

紗羅ちゃんはさっきと同じようなドレスに着替えを済ませ、化粧もし直したらしく、完全に元通りだ。

「あう、しょう君は助けてくれました。格好よかったです」

「そう言われるとくすぐったいな。さて、あんなパーティーに戻り

たくないし、どうするかな？」

そんな時だ。俺の背後の扉が蹴り飛ばされたかのように勢いよく開いた。

「よう、正太郎君！ 早速だがきてやつたぜ！」

大輝、と呼ばれた男が頬を腫らしながら現れた。

「いやあ、貴方がいい人ですね。態態自分から紗羅ちゃんに謝りに来てくれるなんて」

「ああ！？ んなわけねえだろ！ 俺はお前をぶん殴りに来ただけさ」

まあ、だろうね。素直に謝ってくれるなんてないよね。

でも、作戦通りなんだよ。だって、

「お前まだ紗羅ちゃんに謝ってないぞ？」

「年上にお前はねえんじゃね？ 日向を勝手に名乗ってる正太郎君よお」

なんて下品な顔だ。まださっきの女を侍らせてニヤニヤやってる時の方がマシだ。

大輝が手を振り上げた瞬間、部屋の中に六人のメイドさんと執事さんが現れた。

しかも、各々ナイフやら刀やら殺傷能力のある武器持ってるし。ここは日本だよ？いくら敷地内でも犯罪だろアレ。

「ふうん、人数はいるみたいね。でも正太郎にも紗羅にも私がいるんだけど？」

おお姉ちゃんが一步前に出た。腕を組んで格好をつけてはいるが、人数が圧倒的過ぎる。

この状況をなんとかする方法はないだろうか。斎藤さんかじいさんになんとか伝えられれば

「ま、今回は他力本願仕方なしね。さつきは自分の力で勝ったんだからお姉ちゃんが認めるわ。これに電話しなさい」

おお姉ちゃんから渡されたのは一枚の紙と、パーティー会場に持ち込むと言われた携帯電話。

この可愛いメモ用紙には覚えがある。この番号は鈴蘭さんの番号だ。

「やれ！ 正太郎の首を持ってこい！」

大輝の命令によって六人全員が動き出す。首、だなんてちよつと古い言い回しをするな。

周囲で金属音が炸裂している。あまりの速さに人が動いている事しか確認出来ない。おお姉ちゃんが守ってくれているのは分かる、しかし、少しずつだが、おお姉ちゃんの体に切り傷が入っていく。やはり、数が違いすぎる。

なら鈴蘭さんに電話……………って、今から鈴蘭さんにかけて近くにいなきや意味ないじゃん！やっぱじいさんか斎藤さんに

その時俺の携帯電話が鳴った。

『運命』が流れる。この曲は設定では アドレス帳外の番号の
はずだ。

折りたたみ式の携帯電話を開いて、番号を見る。見覚えがあるから、
続いて左手を見る。

「とつとと出なさいよー！」

あお姉ちゃんに怒鳴られたし、とりあえず電話に出よう。

「はい、もしもしー！」

『こんばんは、正太郎様の携帯ですよね？』

「そうですが……………」

『私、たまたま、偶然、正太郎様のいらっしやるはずの屋敷の中に
いるんです！是非この間のご挨拶も兼ねてお会いしたいなあ、と
思っています』

「い、今、今困ってるんです！いきなりで失礼かもしれませんが
ど

混乱してしまって本題にいくまで時間がかかったのが運の尽きか、
その時刀を持ったメイドさんがあお姉ちゃんの横を抜けた。

あんなに速く見えたメイドさんが今は緩慢に見える。このゆっくりの時間の中で俺は必死に紗羅ちゃんの前に立って、少しずつ着実に近づいてくる刀の盾に

「 助けてください！」

「 承知しました」

止まった。

文字通り、メイドさんが完全に停止した。

人間は死ぬ間際に、集中力が極限まで高められるから時間がゆっくりになり走馬灯を見れると聞いた。だから、俺の集中力もある程度を越えて停止の域までいったのかと思えばそうじゃない。

「 鈴蘭、参上」

止まっているメイドさんに指を指すような決めポーズをとっている鈴蘭さんが気づけば俺の横にいた。

「 かつ、かつこいいいいい〜！ 鈴蘭さん凄い格好いいです！」

俺の方に向き直り、眼鏡をクイツと上げる鈴蘭さん。重ねて格好いい。

「 状況は分かりました。 正太郎様、何なりと命令して下さい」

メイド服の裾を持ち上げて一礼する鈴蘭さん。それは作法としてど

うなんだろ、と知識の外の事に思いを馳せながら、きっぱりと言った。

「命令なんてしません」

「え？　なぜです！？　このままでは葵が！」

「俺とおお姉ちゃんは家族です。斎藤さんだって、ついでにじいさんだって、母さんだって、紗羅ちゃんだって。だから、鈴蘭さんはおお姉ちゃんを妹みたいに思ってるみたいですから………俺の姉ちゃんです！」

「馬鹿もここまでくるとびっくりね」

一人動けないでいるから、余裕が出たのか、おお姉ちゃんが返してくる。

ただ、主従関係が嫌なんだ。皆対等、天は人の上に人はつくらず、だ。誰の言葉か忘れたけど。

「福沢諭吉の学問のすすめの言葉です。ちなみに、福沢諭吉の言葉ではなく、アメリカ合衆国の独立宣言の引用ですよ。その用法は微妙に間違ってますが」

凄い、心を読まれたし、眼鏡による知力アップは本当にあっただ！俺も眼鏡さえあれば

「下らないことやっでないで速くしろ！」

おお姉ちゃんカリカリしてるなあ

ま、日頃のやり返しを少し

兼ねてるんだがね。

あお姉ちゃん余裕ありそうだし、怪我もしなさそうだし。

「だから、鈴蘭さん、助けてください！」

「嫌です」

足元がなくなつたように俺は崩れ落ちた。

「そ、そんなあ……………」

「お姉ちゃんと読んでくれなきゃ嫌です」

……………理解するのに少し時間がかかつちまった。

するってえと、なにか、鈴蘭さんは、この知的で素敵な方は……………

……………

「鈴姉」

「はい！」

「あの大輝つて男にまだ謝らせてないんだ。向こうのメイドさん達を怪我させないように大輝だけ引っ張り出せない？」

大輝はメイドさん達の後ろにいるわけだから、文字通り引っ張り出さないとどうしようもない。

もう一発殴つてやったっていい、まだアイツに対してムカついているし。

「…………お姉ちゃんって歳でもないでしょうに……………」

メイドさん達の攻撃を捌きながら、あお姉ちゃんが呟く。

今のはしっかり聞こえたぞ、と思ったその時瞬きしたらあお姉ちゃんが床に寝ていた。

「なんて攻撃でしょう!？ あの戦闘だけは成績のよかった葵が床に寝かされるなんて!？」

うっわー、すげえ棒読みだよ鈴姉。

「鈴姉お願い」

「承知」

しっかり返答してくれた鈴姉だが、それっきりその場を動かない。

「はい、皆無力にしました」

たしかに、さつきまであんなに俊敏に動いていた執事さんにメイドさんが、さつきのメイドさんのように微動だにしていない。

「しょう君、これです」

紗羅ちゃんが鈴姉とさつきの刀を持ったメイドさんの間の空中を指差した。

俺はなんなのか全く理解できず、首を傾げた。傾げたら見付けた、

小さく光を反射しているそれを。

「ちょっとお前らなんで動かないんだよ!？」

この見えそうで見えない系に気づいてない人間が約一名。

「あ、あのー、鈴蘭さん。私は貴方の妹にあたると思うんですが」

寝たまま固定されているあお姉ちゃんの文句は聞いてあげない。今回ばかりはフォローすると俺も危ない。

「やっと二人きりだね。大輝さん、今すぐ紗羅ちゃんに謝るか、謝罪するか、許しを乞うか、好きにしてくださいですよ」

「テメエ、舐めた口きいてくれんじゃんよ。さっきは油断したが、普通に殴り合ってお前俺に勝て……………あれ? いや、ちょっと待て! 体が動かないいい!」

振り返ると鈴姉が態とらしく口笛を吹きながら眼鏡を布で拭いている。吹いて、拭く。高度なギャグだろうか。

という事で心置きなく の前に。

「紗羅ちゃん、こいつどうする? 俺的には殴っちまうのもアリかなあ……………って、暴力よくないけど」

「あう、しょう君の事もお義母さんの事も馬鹿にしました。でも、一発で許してあげてください」

「承知した」

大輝に向き直る。自分の口角が異様に吊り上がるのがわかる。
やべ、恐ろしくなるくらい楽しい。

「ちょっと待って！ 謝るから！ な、正太郎君、やめようぜ！
顔はやめ」

大輝さんがわざわざ指定してくれた殴られたいポイントに拳をぶち
込んだ。

「うおおおおっ！」

「へぶっ！ あおっ、はべっ、おっっ！」

日付かわって次の日の昼間。力の限りじいさんに往復ビンタする。

理由は今日の天気が悪かったから。

でもいいんだが、実際は日曜日の朝っぱらからじいさんの顔を拝ま
なきゃいけないのと、なんかとりあえずなんとなくだ。

とかふざけた理由だったらどんだけ楽だったか。

「正太郎、何故日向の御祖父様にあたってるのかはわかりませんが、私が貴方に嫁ぐと決めたのは貴方だったからですよ？」

今俺に台風を呼び込んだ人、つか、台風、そう俺を飲み込んでグルグル回して　ハリケーンっていうのかそういうの。じゃあ、ハリケーン、ハリケーンのかくや姫だ。

そのハリケーン姫は、日曜の朝に突然現れて『貴方に私の残りの人生全て捧げます』と出会った次の日にとんでもない発言を頂いて、小生は大変驚いて昨日の夜更かしからくる眠気など、どこへやらでございます。」

「姫、ちょっと冷静になってくださいよ。俺は、じいさんの後継者でもないし、いい大学どころか、大学なんかもいかないで、高校卒業したら働こうかな、と思ってるくらい将来の稼ぎに見込みがないような男ですよ？」

「……………それが？」

……………小首傾げる動作も美しい。背景が家の居間じゃなければ絵画になっていただろう。

「いや、だから、その、お嬢様には……………ちょっと辛いんじゃないかなあ、そんな暮らし」

「まあ、正太郎ってばもう私との将来を考えてるのね。嬉しい！」

「ちがつ、違う、違います！」

「私は、貴方が将来なにになろうと、なにをしようとして、それを支え、隣を歩いて行くだけです」

そう言つて微笑む姫は素敵だ。本当に素敵過ぎて、もうなんかそんな未来でいいかなあ、とか思つてしまふ。

つて、ダメダメ、流されちゃダメだ。

「それに私は、お金なんていりませんよ。正太郎と一緒に暮らして、笑つて泣いて、怒つて、それでまた笑う。皆が家族でつくる幸せを正太郎と感じていきたいんです」

もう本当それでいいかなあ、つて気になつてくる。

紗羅ちゃんは姫の大胆な発言にキャパオーバーしたらしくあお姉ちゃんに別室に連れていかれた。

「それは俺とじゃなくて……………別に他の方でも」

「嫌です。正太郎がいいんです……………正太郎じゃなきゃ駄目なんです!」

容姿は……………端麗、胸部は調っているつていうより突出してるが、性格から全て……………大和撫子つて感じだよな。そりゃ、嫌いなわけない。

ええと、俺と姫の関係に足りないもの、足りないもの……………

「えと、お友達から……………また二人ともよく知り合つてないし、その後の関係は追い追ひ……………でどうでしょう?」

「はい、私の心はもう既に決まっていますが、正太郎がそういうのでしたら」

座布団から横にズレて、三つ指ついて姫は頭を下げた。

「不束者ですが、この泉堂かぐや、貴方に一生を捧げます。よろしくお願い致します」

俺の人生がハードモードからベリーハードに移行した瞬間だった。

頭を上げた姫は、

「覚悟してね正太郎」

と可愛くウインクするのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3125p/>

純情と愛情と情緒不安定

2011年11月5日06時13分発行